

北大式土器の型式編年

— 続縄文／擦文変動期研究のための基礎的検討 1 —

榊田 朋広

要旨 続縄文時代から擦文時代にかけての社会の大きな変動期を研究するための基礎作業として、北大式土器の編年を現在の資料水準に則り整備した。北大式の編年は、先行研究に対する内省的検討や相互批判の欠如が多く、混乱をもたらし、いくつもの案が乱立しているのが現状である。そのため、近年の資料の増加にもかかわらず、研究そのものは深刻な停滞状況に陥りつつあるといっても過言ではない。そこで、まず研究の流れを概観し、今日もとめられる北大式研究が、資料の実態に即した時間軸の設定と、土器の型式学的変遷の見極めであることを指摘した。次に、土器の特徴や出土状況といった考古学的情報を最大限に活用し、現在設定し得るかぎりの時期区分案を提示した。さらに、隣接諸型式からの影響も考慮しつつ、北大式の成立・変容の実態について詳細に論じた。

はじめに

本稿の目的は、近年出土資料の増加が著しいにもかかわらず、いまだ多くの問題を抱えている北大式土器の編年を整理し、その型式内容の詳細と変遷の実態を示すことにある。

北大式は、現在、その下限を擦文時代初頭に含める研究者もいるものの、続縄文時代終末期にかかる土器群であるという点においては、一定の共通理解を得ている。河野広道（1959）によってその名称と年代的位置づけが示されて以来、これまでこの土器をめぐる数多くの研究が発表されてきた。当初、タイプサイトでの様相や資料が未公表であったことから、しばらくの間、その実態は不明瞭なままであり続けたが、阿寒町（現釧路市）シュンクシタカラ遺跡（阿寒町教育委員会 1963）や共和町発足岩陰遺跡（小樽市博物館 1963）での発掘成果を受け、まとまって出土した北大式が、その特徴や出土状況などから時間的に細分される可能性が松下亘（1963）によって指摘された。そのなかで北大式は、「施文的に後北式に関連のありそうなグループ」と「器形、胎土焼成、施文から擦文式の関連が考えられるグループ」の2つに分類された。この論考は、北大式が後北式に後続し擦文土器の直前に位置づけられることを、はじめて型式学的視点から明示したものであり、その変遷の実態説明が続縄文土器から擦文土器への変化を解く鍵になり得ることを示したという点で、高く評価されるものである。また、器形や、突瘤文をはじめとする文様要素等、現在までの北大式細別の指標となる要素に注目したことなど、その後の北大式の分析方法に一定の見通しを与えたものと言うこともできる。

松下の研究以後、特に1970～80年代にかけて、この土器型式をめぐる編年案が多く提示されることになるが、土器の型式的特点がきわめて多様であるにもかかわらず、良好な一括出土例や新旧関係を捉えられる層位事例の少なさが原因となり、どの結論も編年としての決め手を欠き、意見の

一致をみることはなかった。こうした結論の溝は、資料の増加や研究の蓄積によって埋められていくかに思われたが、その後に出された論考には先行研究が有していた問題点を省みないものが多くみられ、土器編年における方法論の共有が図られず、また、異なる方法論によって導かれた結論のすり合わせもなされなかったので、多様な結論だけが氾濫するという現状が導かれることになった。土器編年という作業にも結論を導き出すためのいくつかの異なった方法が存在し、そのなかから対象とする資料に適したものを模索し選択していかなければならない。ゆえに、北大式の編年研究にも絶対的な方法論があるなどとは思えない。しかしながら、各氏が選んだ方法でどこまで説得力のある論を展開でき、どのような限界があるのか、相互できちんと理解を共有しないかぎり、議論はともすれば不毛な水掛け論に終始するだけであろう。資料が圧倒的に増加した今日においてまずなすべきことは、分析結果のみならずあつかった方法論にまで焦点をあてた、先行研究に対するいまいちどの整理と検討であり、それによって、現在の資料水準からみた各論の問題点や今後の研究の展望を、より鮮明に浮かびあがらせることができるはずである。本稿は、先行研究の方法論も含めた土器に対する認識の相違点や各論がもつ問題点・限界点を整理したうえで、現在の資料の実態に即した編年案をあらためて提示し、当該期の研究の一助とするものである。

北大式土器の研究史と問題の所在

1. 北大式土器研究の流れ

北大式をめぐるトピックのうち、議論が集中したのはその編年および文化の帰属に関する問題であるが、とりわけ後者、すなわち北大式を「続縄文文化と擦文文化のどちらに位置づけるか」という問題が、編年研究と同等かあるいはそれ以上に引き上げられてきた。それは、この型式が続縄文文化から擦文文化への移行的な時期に相当することとも無関係ではない。そして、後述するように、文化に対する定義の違いが編年研究にまで深い影を落とし、研究者間で認識のズレを生じさせているという面も見受けられる。そこで、まず、北大式に対する認識が資料の増加や研究の進展とともにどのように変わっていったのかを簡単にみておきたい。

はじめにも述べたように、北大式の名称を最初に用いたのは河野広道である。現在で言うところの縄文文化後半から続縄文文化期に相当する土器は「北海道式薄手縄紋土器群」と総称され、それらは前北式（前期北海道式薄手縄紋土器）と後北式（後期北海道式薄手縄紋土器）の2つに大別されていた（河野 1933）。名取武光（1939）は、このうち後北式末期の土器群をそれまでの土器と次期の擦文土器との中間形とみなし、河野（1955）は、こうした縄文土器から擦文土器への移行的形態を示すものを「後北 E 式」と呼んだ。後年、札幌市北海道大学校庭から出土したものを標識資料としたことから「北大式＝後北 E 式」という形で呼びかえ、その名称をはじめて学会に示した（河野 1959）。そこでは、器形や文様といった土器の型式学的特徴が詳しく述べられていた。そして、はじめに述べた松下亘（1963）の論考によって、北大式研究の方向性は定められたといつてよく、

北大式土器の型式編年

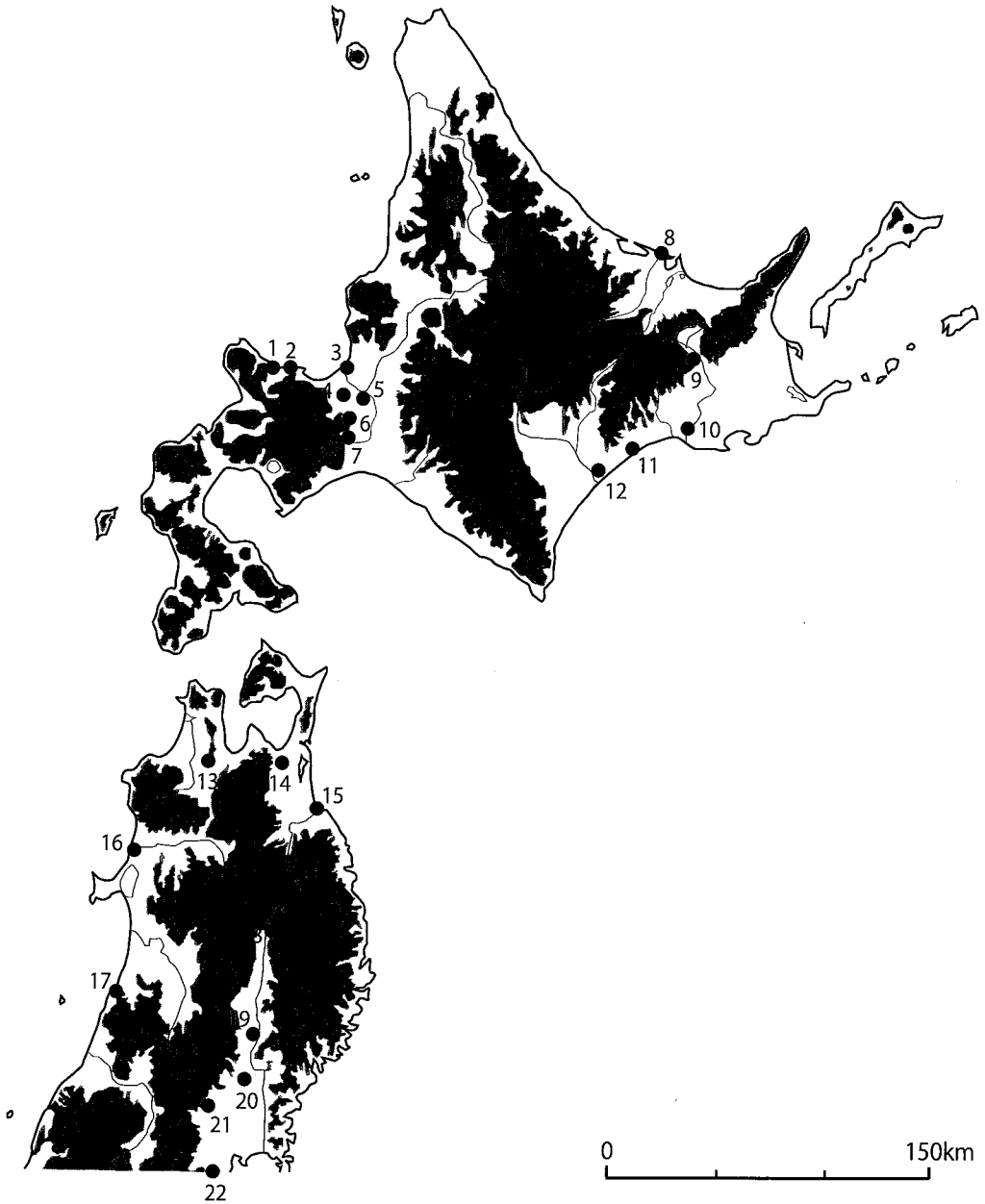


図1 本稿の分析で扱う土器が出土した遺跡

1. 大川・天内山；2. 蘭島D地点；3. 八幡町ワッカオイ地点；4. ポプラ並木東地区・C507・M459・S153；
5. 吉井の沢1・萩ヶ岡・高砂；6. 西島松5・柏木B・カリンバ2・ユカンボシE5・ユカンボシE7・ユカンボシC15；
7. ウサクマイA地点・N地点；8. トコロチャシ跡・常呂川河口；9. 下鑑別B地点；10. 床丹；11. ノトロ岬；
12. 十勝太若月；13. 隠川(11)；14. 森ヶ沢；15. 田向冷水・市子林；16. 寒川Ⅱ；17. 宮崎；18. 永福寺山・高柳；
19. 中半入；20. 伊治城；21. 木戸脇裏；22. 鴻ノ巣

以後は松下の問題提起に答える形で、各氏により増え続ける資料の検討がなされ、北大式に対する認識が深められていくことになった。

なかでも北大式研究に拍車をかけたのは、東北地方での発掘調査を経て出土した土師器研究の進展であった(氏家 1957; 桜井 1958)。「東南北部―東北北部―北海道」が編年のうででヨコに結ばれ、相互の共時関係や絶対年代を論じることが可能になったのである。これによって、北大式のある時期に東北地方の土師器が併行して存在したことが確実となり、次第に北大式とそれを取り巻く諸型式の関係論へと議論は発展していく。その一方で、道内での土師器の出土例も着実に増え続けた。こうしたなか、擦文土器の器形や器面調整が、北大式よりも道内出土土師器に類似する点が注目され、擦文土器の母胎を土師器に求めようとする考えが数多く提示されることになった(石附 1968; 斎藤 1967, 1983; 横山 1982)。そして、このような考えは、その後の北大式の時期区分案に大きな影響を与えることになる。それは、松下(1963)が北大式を分類したうちの二類、すなわち、「器形、胎土焼成、施文から擦文式に関連が考えられるグループ」を北大式に含めるか否かということが、俄然問題となってきたことである。というのも、北海道での発掘調査件数の増加や東北地方での土師器研究の進展に伴い、この松下のいう二類土器に土師器杯や須恵器が共伴することが明らかになり、それらを擦文土器や土師器との兼ね合いから再び定義しなおす必要が出てきたからである(斎藤 1967; 横山 1984)¹⁾。このように、「北大式からどのように擦文土器に変化するか」という問題がクローズアップされたため、北大式は、土器そのものの違いのみならず、「続縄文土器」や「擦文土器」に対する定義に整合するように時期が区分されることになった。

このような研究の流れをみてくると、北大式は、続縄文土器・擦文土器・土師器(あるいは続縄文文化・擦文文化・土師器文化)といった大別的な枠組みの間に位置づけられる地理的・年代的性格を有するがゆえに、それらの大別をどのように定義するかによって、時期区分の根拠や型式的枠組みに対する認識が左右されやすいという難点をもっていたことがわかる。しかしながら、いまみた「北大式をどのように認識するか」という問題は、言いかえれば「北大式をすべて続縄文土器のなかに含めるか、一部を土師器として続縄文土器から除外するか」という、あくまで研究者の定義上の差に由来するにすぎない²⁾。無論、こうした定義上の問題は、土器編年をはじめとする基礎研究を積み重ねることではじめて検討が可能になり、定義そのものの説得力も増していくはずである。とはいえ、当時の議論では、北大式を続縄文文化・土師器文化・擦文文化のいずれに位置づけるかということに重点が置かれた一方で、土器そのものの詳細な検討は、いくつかの編年研究を除いてほとんどなされてこなかったようにみえる。これは、資料の少なさや層位的出土例といった客観的データの不足が、この方面の研究を遅らせていたためと考えられる。したがって、90年代以降に出土数が圧倒的に増加した北大式の研究課題として、今日の資料水準に則した編年の整備や型式学的研究といった基礎的検討をすすめることができるといっても過言ではないのである。

それでは、果たして近年の北大式研究が進展していると言えるだろうか。残念ながら、筆者の目にはそのようには映らない。たしかに、北大式をめぐる各研究者の考えがシンポジウム上で提示さ

れ議論が交わされたことなど重要な動きはみられるものの（天野編 2004：1-21）、その後に出された論考に、こうした場での各氏の意見提示や相互批判が生きているようにはとてもみえないのである（鈴木ほか 2007；塚本 2007）。また、80 年代以前の北大式編年が抱えていた問題をたな晒しにしたままで、「続縄文土器」「擦文土器」「続縄文文化」「擦文文化」の定義づけや、「文化の担い手が誰か」といったより抽象的な問題のほうに積極的に論じられるために（たとえば天野編 2004：22-90）、土器群に対する解釈の幅が狭められ、当該期の土器研究は深刻な停滞状況に陥りつつあるとさえ感じている。

たとえば、これまでの北海道・東北における北大式研究には、文献史学によって検討されてきた「エミシ」「エゾ」の時空間的範囲を前提とし、その範囲内に認められる土器群を民族・集団・社会関係等の歴史的事象を直接示す単位であるかのようにみなす傾向が一部でみられた（阿部 1998；石附 1968；斉藤 1967）。また、特定の文様・器形・製作技法のみを抽出し、実体的な「人間集団」に 1:1 に対比させる論考もしばしばみられる（大井 2004a）。こうした研究のなかでは、「土器群の時空間的なまとまりが実体的な集団を反映する」ということに対する肝心の根拠が不問に付されており、解釈に飛躍があるのは明らかである。³⁾ 文献史学の成果を無批判に援用した土器群の拡大解釈は、土器研究そのものの停滞につながりかねないであろう。いま一度、北大式を、当該期研究の基礎資料として考古学的に位置づけなおすことが急務の課題だと筆者は考える。

2. 北大式土器の大別研究とその限界

これまでの北大式研究は、後続する擦文土器（擦文文化）とのつながりを考える都合上から、器種組成の変化を重視したものがほとんどだったと言っても過言ではない。たとえば、器種組成の様相は、北大式そのものの時期区分の根拠としても採用されてきた。たしかに、北大式のうち新しい時期における本州系土器の共伴は、時間軸を区分するうえでも非常に捉えやすい事象であり、器種組成の変化が大別の指標にされてきたことにも理由がないわけではない。石附喜三男（1968）は、先にも紹介したように北大式と擦文土器を土師器との関連で捉えるなかで、器種組成の類似を根拠に土師器から擦文土器への直線的な変化の流れを考える一方で、後北式の系統を汲む北大式と擦文土器との関連性には、一部の文様要素とのつながりを認めている以外（石附 1984）、否定的な立場をとった。しかし、上野秀一（1974）が指摘しているように、氏の論考のなかでは多様な器形・文様・器面調整をもつ北大式そのものの詳細な検討がほとんどなされていない。また、斉藤傑（1967）は、北大式に特徴的な文様として「突瘤文」「縄文」「隆起線文」「沈線文」を挙げ、それらの組み合わせや個別要素の消長といった型式学的変化を通時的な変遷の根拠にする一方で、前の型式と区別する根拠として「須恵器の共伴」を挙げたが、その後の擦文土器の文様との型式的関連の問題は不問に付されている。このように、北大式の大別研究においては、器種組成の変化に比して土器の一連の型式的変遷の様相が、ほとんど検討されてこなかったのである。

とはいえ、まだ資料数の少なかった 80 年代以前においては、こうした土器研究の姿勢でも、文

化論や集団論に踏み込むことは可能であった。たとえば、斉藤傑（1967）は、擦文文化の概念の決め手になるものは「住居址の構造」と「土器の組み合わせ（器種組成）」であり、この両者がそろったときに先行する文化と擦文文化とを区別できる、という考えを示した。そのうえで、「北大Ⅲ」を出土する住居址が未発見であり、その構造も明らかでないという事実が擦文文化の概念からはずれるので、北大式土器をもった人たちは擦文文化に属さない人々であった、とみなしているように、土器を根拠の一部に据えた集団論へ歩を進めている。この見解は、「擦文文化の土器が擦文土器」であり、「北大式土器は擦文文化に属さないため擦文土器には含まれない」という論理構成となっている。すなわち、文化の定義が土器型式に優先して考えられているわけである。

しかしながら、近年、東北地方における当該期の資料が増加し比較研究が進んだことで、北海道のいわゆる「土師器文化」の様相が東北地方とは独自の特徴を示し、在地の縄文系の人々の関与も看過し得ないことがわかってきている（宇部 2007；八木 2007）。また、北海道出土の土師器や北大式と東北地方土師器との比較から、北海道在地の人々によって土器の属性が「選択的」に受容されていたという見解も提示されている（鈴木ほか 2007）。擦文土器の成立に関与したとみなされてきた時期の土師器が多く出土した千歳市丸子山遺跡（千歳市教育委員会 1994）では、擦文文化に「典型」とされる構造をもたない堅穴住居址が検出され注目を集めたが、そうした類例は石狩低地帯で数多く報告されている。このように、「土師器文化」と擦文文化の住居構造や土器の器種組成の類似が、果たして両者のダイレクトなつながりを示すのか、ということが検討されなければならない局面にきているわけである。文化と文化の移行期をみると、土器や文化要素を毅然と分かち、個別の資料をどちらか一方に振り分ける視点では、どうしても視覚的に捉えやすい要素を備える文化の「優位性」が強調され、ともすれば2つの文化同士の関係は、「支配－被支配」「吸収－消滅」といった、言わば極端な解釈に終始しかねない（大井 2004a）。無論、そうした関係が存在したことを完全に否定することはできないが、いま述べた認識だと、それ以外の文化同士の関係を考古学資料から導き出しにくいという難点が、常につきまとうことになる。

このように、先に文化概念を用意し、土器を出土状況に応じて文化ごとにカテゴライズしていくような姿勢では、より細かな地域間関係の把握が求められる近年の研究の要請には、もはや応えられなくなっているのである。丸子山遺跡のように東北部との関連性の強い集落の存在や、東北地方における縄文文化に特徴的な墓の検出数の増加は、考古学遺物のドラスティックな変化を当該期に想定することを困難にしているようにみえる。それならば、「何によって分けるか」ということにこだわるより、まずは遺物・遺構の変化をしっかりと見極めたうえで、文化に対する定義づけの根拠を鍛えていくべきだと筆者は考える。

3. 北大式土器研究の今日的展望

無論、北大式が当該期のもっとも普遍的な基礎資料である以上、その研究の徹底がきわめて重要となることは多言を要しない。とはいえ、文化の定義に縛られた北大式の研究が、実りの多い成果

を生むとは思えない。むしろ、個体別の型式学的分析をとおした北大式の系統論的研究こそ、遺物の変化の見極めのためにもっとも重視されなければならないであろう。

当該期の土器の型式学的系統論を展開した先駆的業績としては、佐藤達夫（1972）の論考があげられる。氏は、北大式を後北式や土師器、擦文土器といった隣接諸型式と対比させつつ、それらの系統関係を予察したうえで、「擦紋土器は新来の土師器が変化したというわけではなく、従来の続縄文土器が土師器の影響下に変化したもの」（前掲：468）と考えた。この結論自体は、現在の資料から検討すべき問題であり、本研究で明らかにしていく課題でもあるのだが、ここでは、氏がとった当該期の土器研究法を重視したい。土器同士の型式学的系統関係の見極めを徹底させる姿勢から導かれた当該期の土器変遷の様相は、北大式には北大式の、土師器には土師器の変遷がそれぞれあり、ときには影響を与えあうといった複雑なものであった。近年道内で増加した土師器は、東北地方のそれとは異質であり、在地の北大式との関連が指摘されている（宇部 2007；八木 2007）。このような今日の土器群の様相を鑑みるならば、佐藤の見通しはおおむね妥当であったと言える。北大式を「続縄文土器的か土師器的か」という見方で括る視点が単純に過ぎることが示唆されている。

たしかに、土器群の総体としての器種組成が考古学文化を把握するうえでも有効なことは論を俟たないし、異なる由来の土器が同じ地域で錯綜する状況のなかで、一括出土した土器群を、一つのまとまりとして大きく括ってしまうのも便宜的な方法には違いない⁴⁾。しかし、一つの遺構あるいは地域から出土する、多様な系統をもつ土器群を対象に、「土器群の総体がいかにして成り立つのか」を系統的に追究することも、同じくらい重要なはずである（比田井 2002 など）。いや、土器群を静態的なまとまりとして扱うのではなく、あらゆる地域間の交渉関係のもとで発現した動態的なものとして捉える視点こそ、近年の研究動向に整合的であるし、そのための方法が模索されてしかるべきである。土器群の認識にしても「文化」の認識にしても、我々が仮に設定したそれらを実体的な「人間集団」や文献史学等の成果によって示された歴史事象に直接対比させる前に、「集団同士の関係のなかで、我々が設定し得る土器型式（あるいは様式）や「文化」がいかに発現するのか」といった、より柔軟な分析視点によった考古学的方法論を鍛えていくのが先であろう。先験的な文化概念に応じた土器の振り分けではなく、土器そのものの分析を通し、我々が「考古学文化」として設定し得る土器様相がいかに発現するのかを問うていくことを当該期の土器研究に課された今日の課題とするならば、佐藤がおこなったような土器研究法は、大いに継承していく価値があると筆者は考える。

無論、北大式そのものの型式学的分析を推し進めた研究も、これまで少ないながらも提示されてきた。擦文土器にみられる鋸歯状の沈線文などに続縄文土器の系統を認める菊池徹夫（1972）の論考などが、早い時期のものでは代表的であろう。北大式を型式学的差異によって分類した上野秀一（1974）は、自身が調査した札幌市 N126 遺跡（札幌市教育委員会 1974）の堅穴床面での土師器と北大式の共伴事例を受け、北大式から擦文土器へのつながりを認めながらも、それが一系統のものではなく、土師器との関係も否定できない可能性を述べた。そこには、佐藤が示唆した擦文土器の成立にいたる諸型式の複雑な系統関係が暗示されていた。また、西蓮寺健（1981）は、突瘤文や文

様の組成等、それまで時期区分のメルクマールにされてきた諸要素（斉藤 1967）によって分類された土器群に時間的な差がない可能性があるとし、それまでの北大式の見方を根本から批判した。この論考は、土器を個体別に観察し、それぞれの型式学的系統を解釈したばかりでなく、後北式、東北地方の終末期弥生土器、土師器などとの頻繁な型式間交渉の存在を各要素の出現背景に想定するなど、それまでの研究とはスタンスが異なっており、佐藤の研究に近い。そのほかに、北大式の文様に多様性を認めただけで、一貫して存続する要素の消長を時期区分の根拠に据えた田才雅彦（1983）の論考もある。このように、細別研究者に共通していたのは、北大式は「続縄文土器」「土師器」「擦文土器」という大別的枠組みのなかで位置づけるには、あまりに多様かつ複雑すぎるという認識をもっていることであった。しかしながら、個別要素の組列に対する認識は大まかに共通していたものの、当時の資料の少なさによって、時期区分に対する認識までが意見の一致をみたわけではなかった。さらに、以下でも述べるが、近年の調査によって、これまでの編年が出土状況からみて破綻していることも明らかになっている。

したがって、いかに個体差の大きい北大式を整理し、出土状況に抵触しない細別型式を設定するか、いかに北大式と隣接諸型式との型式学的交渉関係を読み取り、擦文土器の形成過程を解明するか、この2点が、今日の北大式研究においてクリアすべき課題として立ちはだかってくるわけである。

4. 分析の方針

これまでに提示された編年は、各氏の用いる型式名や時期名、さらにはその内容さえも意見の一

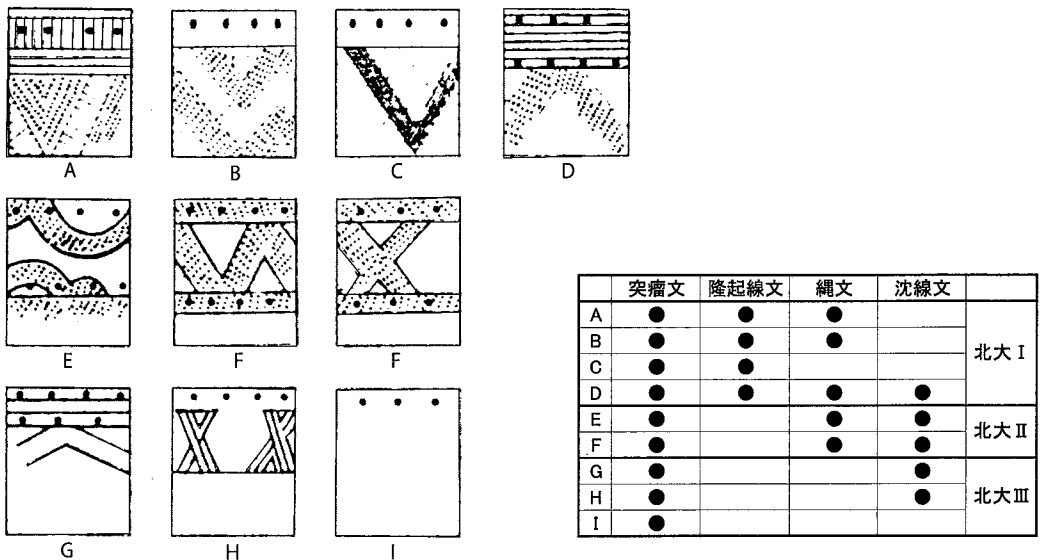


図2 斉藤 1967 による北大式の文様構成分類

A～D. 北大 I；E・F. 北大 II；G～I. 北大 III

致をみていない。そのため、まずはこれらの内容について、今日の資料水準に則り検討していきたい。現在、もっとも研究者間に浸透しているのは、「北大Ⅰ式」「北大Ⅱ式」「北大Ⅲ式」という3型式からなる編年であろう(図2)⁵⁾。近年、この編年は層位的にみて破綻していることが明らかにされており(鈴木2003; 塚本2007)、型式としては成立し得ないとも指摘されている(鈴木前掲)。これまでの編年が疑問視されたのは、次の2つの事例に注意が払われたことによる。

- ① 恵庭市ユカンボシE5遺跡(北海道埋蔵文化財センター1993b) GP1 や同市ユカンボシE7遺跡(北海道埋蔵文化財センター1999) P-46 等の遺構において、「北大Ⅱ式」と「北大Ⅲ式」が共存していること(図3)

- ② 突瘤文をもたない土器が一貫して存在すること(大沼1982; 西蓮寺1979; 鈴木2003)

先行研究では、「縄文の有無」「突瘤文の有無」「ハケメ調整痕の有無」といった、土器の個別要素の違いが細別の指標にされ、型式が設定されてきた。無論、これまでも注目されてきたように、それらの量的な多寡は「後北C2・D式—北大式—擦文土器」という一連の変遷の流れを的確に示している。しかしながら、上記の2事例は、要素を個別に抽出するだけでは北大式の細別型式を設定できないことを如実に物語っている。なお近年、時期が新しくなるにつれハケメ調整痕が増加するという傾向から、ハケメ調整痕の出現が編年の面期ないし細分の指標とされることがある(鈴木2003)。しかし、ハケメ調整痕をもつ「北大Ⅰ式」「北大Ⅱ式」が存在することからも(図4)、ハケメ調整痕は各時期において存在したとみられ、この有無をもって時期を区分することには問題があると言わざるを得ない⁶⁾。

注意しておかなければならないのは、北大式を構成する要素とは、後北C2・D式から系統的に受け継がれるものだけではないということである(上野1974; 西蓮寺1979)。たとえば、この時期

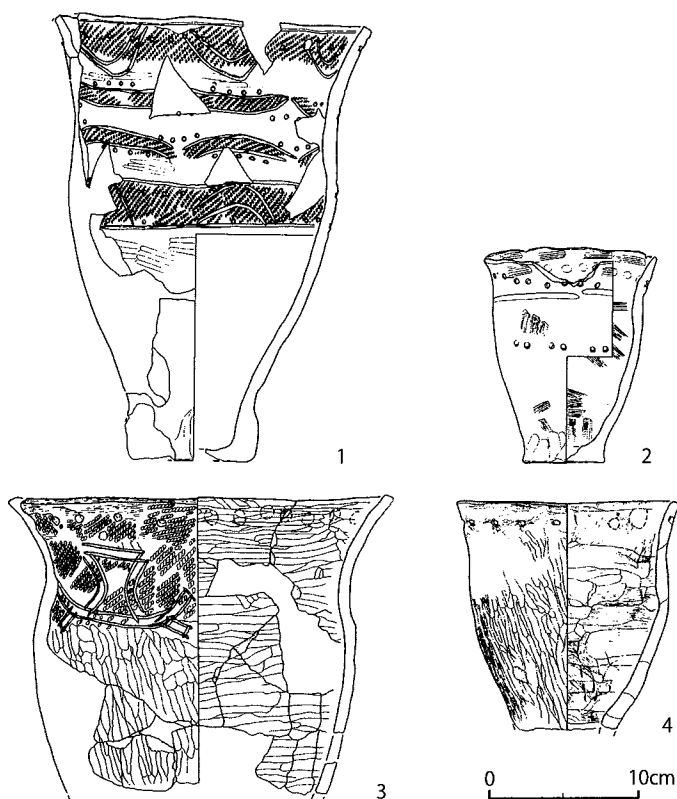


図3 「北大Ⅱ式」と「北大Ⅲ式」の共存例

1・2. ユカンボシE5遺跡 GP1; 3・4. ユカンボシE7遺跡 P-46

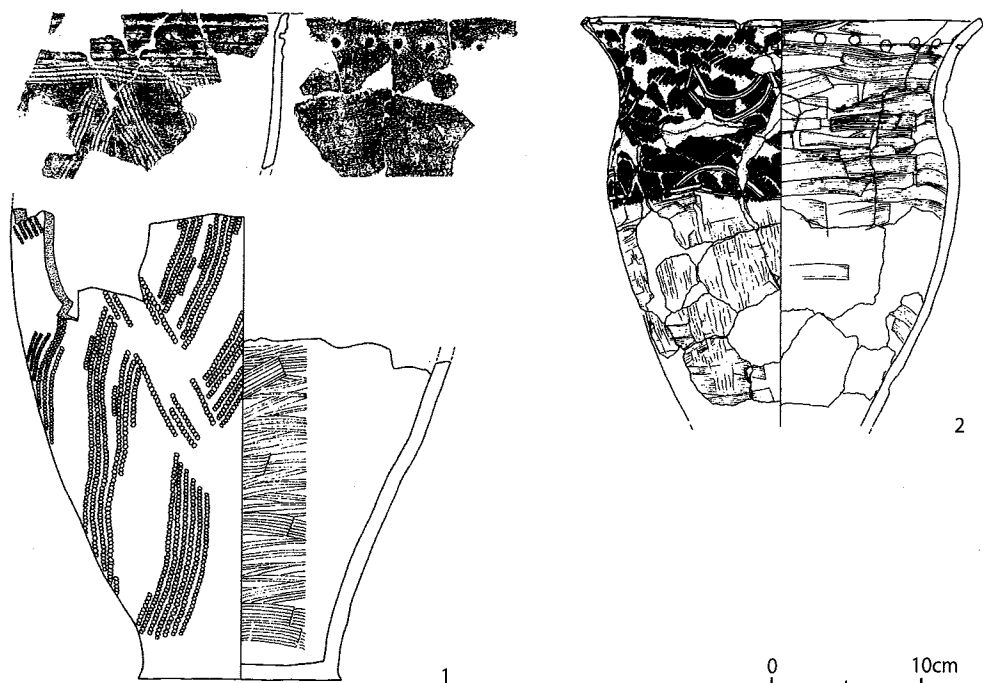


図4 ハケメ調整痕をもつ「北大Ⅰ式」・「北大Ⅱ式」

1. 静川 26; 2. ユカンボシ E7

は、東北地方の土師器が道内に多く出現する時期にあたるので、それらが道内在地の土器に与えた影響にも注意を払う必要がある。いまみたハケメ調整痕の出現は、むしろ東北地方土師器からの単発的な影響と捉えたほうが理解しやすい。すなわち、北大式は、後北 C2・D 式から受け継がれる要素と隣接諸型式から受け入れられる要素が複雑に入り混じりつつ変化していくものだと判断できる。北大式の通時的な変遷を理解するためには、これら複雑に絡み合った諸要素を可能なかぎり系統別に解きほぐし、後北 C2・D 式からの系統と隣接諸型式からの系統とを峻別し、それらの連関状況の構造的な変化を把握していかなければならないのである。

本稿では、以上のような視点に立ち、北大式を分析していく。結論から述べると、着眼点を変えて分析することで従来の型式内容をあらためさえすれば、旧来の 3 時期編年は依然有効であり、型式設定も十分可能になることが、以下の分析で明らかになるであろう。

5. 分析の手順

北大式の甕（深鉢）には、いくつかの文様が組み合わさるもの（以下、有文甕形土器と呼称）と、突瘤文が口縁部に施されるだけのもの（図 15）がある。両者の違いは、頸・胴部の文様帯の有無にある。これまで、後者の土器群は「北大Ⅲ式」に位置づけられていたが、突瘤文の有無だけで時期差を判断するのは、先述のとおり問題がある。鈴木信（2003）は、近年これを「円形刺突文土器」と呼んでおり、有文甕形土器とは分けてあつかっている。北海道日本海沿岸部や東部、および東北

地方北部では、胴部の無文化はすでに後北 C2・D 式期から始まっているようであり（石井 1994；熊木 2001；小林 1993a・b；佐藤 1984；野村他 1992）、北大式においても、頸・胴部以下に文様帯を有さない土器が一貫して存在していたと考えるのが自然である。いわば土器に「精粗」の分化がみられ（小林前掲）、「円形刺突文土器」はこのうち「粗製土器」に相当するとみられることから、有文甕形土器とは別に分析するのが妥当であろう。

このほか、北大式には注口土器、片口土器、浅鉢など多様な器種が存在する。注口・片口土器は資料数が少なく、時間的変化を反映する属性も乏しい。これは、「円形刺突文土器」も同様である。したがって、まず時間的変化を反映する属性数の多い有文甕形土器の分析をおこない、時間軸を設定する。次に、「円形刺突文土器」、注口土器、片口土器の順に分析をおこない、有文甕形土器の時間軸に組み込む。最後に、すべてを総合した編年を提示する。以上の手順で分析をおこなうことにする。⁸⁾

後北 C2・D 式と北大式の間

北大式の編年を検討する前提として、直前の型式である後北 C2・D 式とのつながりを解明し、北大式の最初期に対する筆者の理解を示しておきたい。

1. 「モヨログループ」の位置づけをめぐって

田才雅彦（1983）は、後北 C2・D 式に突瘤文が加わった資料について、「北大式誕生への胎動を示すもの」（前掲：20）として注目し、突瘤文の存在から後北 C2・D 式の範疇からはずし、「モヨログループ」と

呼称すること

を提唱した

（図 5）。氏は、

このグループ

から次のグ

ループ（田才

分類 2 類）へ

の移行を、「北

大式土器の誕

生を意味す

る」（前掲：

21）としてい

るので、「モ

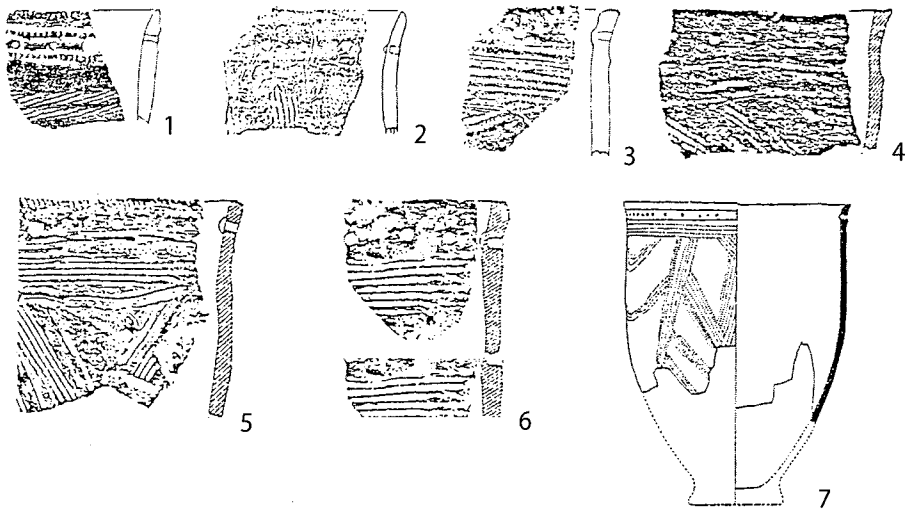


図 5 「モヨログループ」の諸例

1. 柏木 B；2. 大淵貝塚；3. 開成 4；4～6. モヨロ貝塚；7. 安平 D 縮尺不同

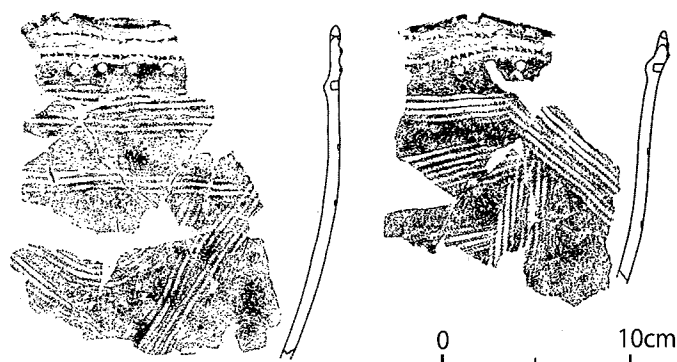


図6 S153 遺跡第774号ピット出土土器

貼付文を有する一方で突瘤文も備えており、まさに後北C2・D式と「北大I式」の中間的様相を呈している。このような特徴をもった土器が、遺構からほかの土器を伴わずに出土している点を積極的に評価するならば、独立した時間軸として設定しうる可能性もある。

しかしながら、千歳市ユカンボシC15遺跡（北海道埋蔵文化財センター1998c）F-1遺構において、「後北C2・D式」と「北大I式」の共伴が確認できることから（図7）、ただちに「モヨログループ」を時間的まとまりとみなすわけにもいかない。かといって、この共伴事例をそのまま容認すること、後北C2・D式と「北大I式」という細別された2型式の同時存在を認めることになるわけだから、編年上不都合であることは論を俟たない。したがって、こうした各土器群の錯綜した出土状況を矛盾なく説明するためには、まず後北C2・D式・「モヨログループ」・「北大I式」を同じ視点で分析し型式組列を把握したうえで、遺跡ごとの出土状況をみていく作業が必要になる。そのうえで、どのような解釈がもっとも資料の実態に即しているのかを見極めるのが順当であろう。

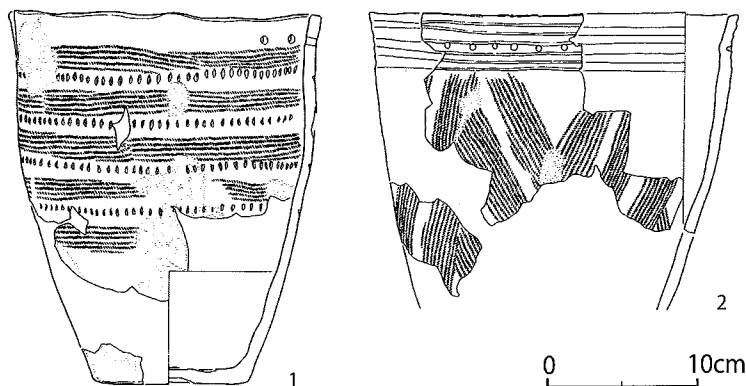


図7 ユカンボシC15遺跡F-1出土土器

1. 「後北C2・D式」と報告された土器；2. 「北大I式」と報告された土器

ヨログループ」を後北C2・D式と北大式の中間的様相を示すものと捉えているようである。

このような土器群の編年の位置づけを考えるうえで、札幌市S153遺跡（札幌市教育委員会1976）第774号ピットから出土した2個体の土器は重要な問題を提起する（図6）。胴部文様はRL帯縄文のみで、口唇部下に2条の

2. 道央部における後北C2・D式から北大式への変遷

これまで、後北C2・D式の編年研究は多くの研究者によっておこなわれているが、ここでは熊木俊朗（2001）の編年を参考にする。それは、氏の編年が型式学的方法によって組まれており、同じ方法をとる本論との整合を図りやすいためである。とはいえ、氏が主に扱ったのは道東

北大式土器の型式編年

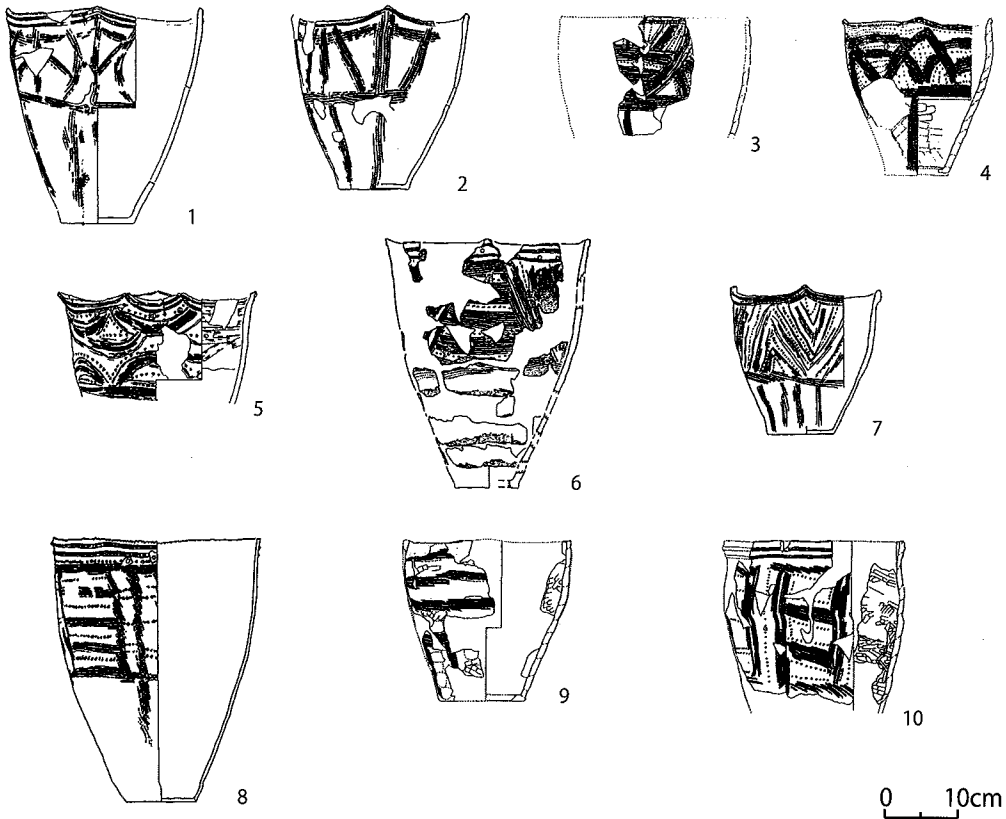


図8 熊木編年後北 C2・D 式Ⅲ期

1～4. 鈴木 2003 の d 段階；5～7. 同 e 段階；8～10. 同 f 段階

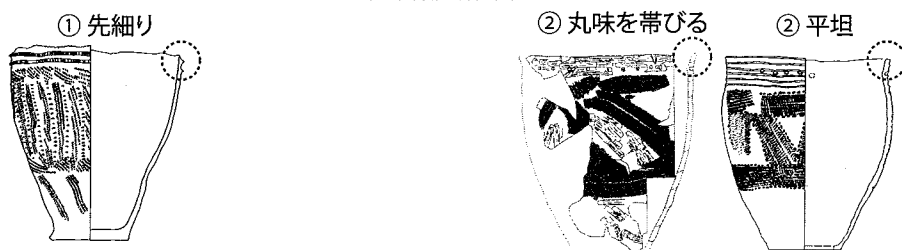
部の資料であり、道央部を中心に出土する北大式と直接比較するには問題がある。幸い、道央部の後北 C2・D 式の詳細な分析は鈴木信（2003）によってなされており、熊木（2001）によって細かな編年対比がおこなわれている。そこで、鈴木の時区区分を、熊木による型式学的視点で置き換えた編年（熊木編年後北 C2・D 式Ⅰ～Ⅲ期）を比較の対象に据えることにする。すなわち、道央部の熊木編年後北 C2・D 式Ⅲ期（図 8）と「モヨログループ」、そして「北大Ⅰ式」の諸属性を抽出し、比較を試みるわけである。

2-1. 属性の抽出

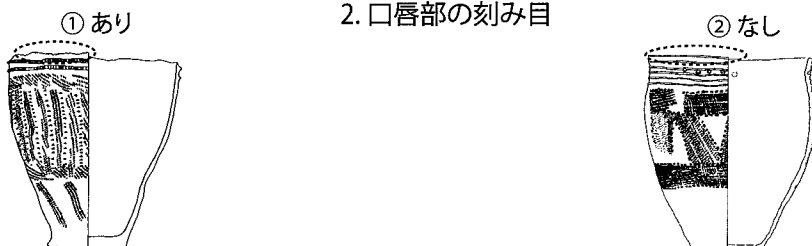
着目する属性は、①後北 C2・D 式に主体的にみられ北大式にふるわなくなるもの、②後北 C2・D 式にふるわず北大式に主体的にみられるもの、の 2 つに分けることで、その変遷過程を捉えやすくなる。

すなわち、その全容は以下ようになる（図 9）。

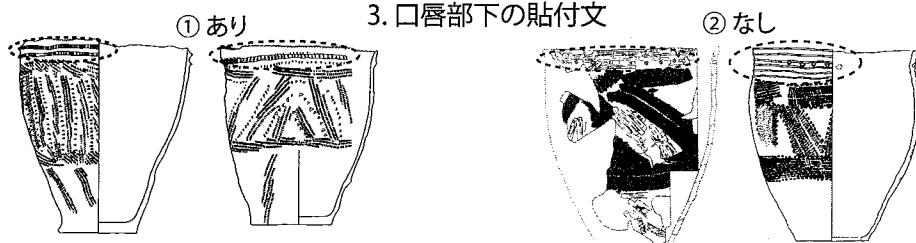
1. 口唇部断面形態



2. 口唇部の刻み目

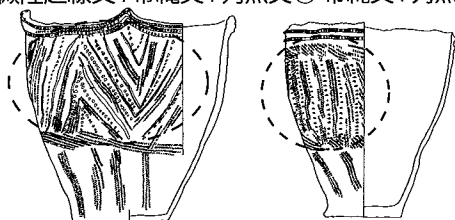


3. 口唇部下の貼付文



4. 体部文様要素の組成

① 微隆起線文+帯縄文+列点文 ① 帯縄文+列点文

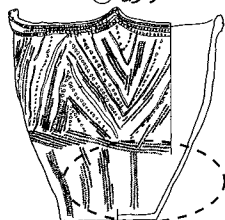


② 帯縄文のみ



① あり

5. 体部下位の縦走る帯縄文



② なし

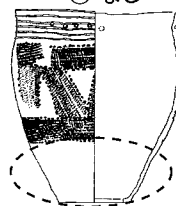


図9 着目する属性①

1. 口唇部断面形態

- ① 先細り（熊木のいう「尖る」におおむね対応）
- ② 平坦か丸味を帯びる

2. 口唇部の刻み目

- ① あり
- ② なし

3. 口唇部下の貼付文（後北 C2・D 式に一般的な、刻みのある 1～3 本の貼付文）

- ① あり
- ② なし

4. 体部文様要素

- ① 「微隆起線文＋帯縄文＋列点文」「帯縄文＋列点文」
- ② 帯縄文のみ

5. 体部下位の縦走する帯縄文

- ① あり
- ② なし

1～4は、熊木の研究によって、後北 C2・D 式の変化をよく反映する属性として示されているので、ここでも比較の都合上採用する。5は、以下の分析で示すように、後北 C2・D 式と北大式の違いを比較的よく反映するので、あらたに採用する。

2-2. 属性分析

表 1 は、道央部における、Ⅲ期の後北 C2・D 式、「モヨログループ」、「北大 I 式」が備える属性を、上記にならって分けたものを示したものである。

みると、石狩市八幡町遺跡ワッカオイ地点（石狩市教育委員会 1975, 1976, 1977）と恵庭市柏木 B 遺跡（恵庭市教育委員会 1981）の各土坑では、属性①「後北 C2・D 式に主体的にみられ北大式にふるわなくなるもの」を備えた資料がまとまって出土する傾向にあることがわかる。特に前者では、異なる型式が場所を違えてまとまって出土しており、そのうち D 地区では、Ⅲ期の後北 C2・D 式が「北大 I 式」を混じえずに出土しているので、時期区分のうえでも参考になる（図 10）。

一方、江別市吉井の沢 1 遺跡（北海道埋蔵文化財センター 1982b）からは、上記 1～5 の属性

	口唇部断面形態			口唇部の刻み目		口唇部下の貼付文		体部文様要素の組成			体部下位の帯縄文	
	先細り	平坦・丸		あり	なし	あり	なし	帯縄文+微隆起線文+列点文	帯縄文+列点文	帯縄文のみ	あり	なし
ワッカオイ地点D地区 第21号墓	●			●		●			●		●	
ワッカオイ地点D地区 第25号墓	●			●		●		●			●	
ワッカオイ地点D地区 第32号墓	●			●		●			●		●	
ワッカオイ地点D地区 第11号墓	●			●		●			●		●	
ワッカオイ地点D地区 第14号墓	●			●		●			●		●	
ワッカオイ地点D地区 第20号墓	●			●		●			●		●	
	●			●		●				●	●	
	●			●		●		無文			無文	
	●			●		●				●	●	
	●			●		●			●		●	●
柏木B 第3号土坑墓	●			●		●			●		●	
柏木B 第190号土坑墓	●			●		●			●		●	
柏木B 第202号土坑墓	●			●		●			●		●	
柏木B 第265・266号土坑墓	●			●		●				●	●	
柏木B 第316号土坑墓	●			●		●			●		●	
ワッカオイ地点D地区 第2号墓	●			●		●			●			●
ワッカオイ地点D地区 第17号墓	●			●		●			●			●
柏木B 第247号土坑墓	●			●		●				●	●	●
S153 第774号ピット	●			●		●				●	●	●
	●			●		●				●	●	●
ユカンボシ C15 F-1 (焼土)		●		●		●			●		●	●
		●		●		●			●		●	●
吉井の沢1 E-13 (配石)		●		●		●		幾何学形の微隆起線文+帯縄文(※1)				●
	●			●		●				●	●	●
柏木B 66号土坑墓		●		●		●				●		●
吉井の沢1 P-174		●		●		●		無文				●
吉井の沢1 P-197		●		●		●		無文				●
吉井の沢1 E-7		●		●		●		幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●
		●		●		●		欠損			欠損	
柏木B 55号土坑墓(※2)	欠損							幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●
	欠損							幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●
	欠損							幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●
柏木B 69号土坑墓(※3)		●		●		●		幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●
	欠損							幾何学形の微隆起線文+帯縄文				●

※1...「幾何学形の微隆起線文+帯縄文」は、「北大I式」に特徴的な、厳密な文様の割りつけをもたないものである(図11-4・6参照)。

※2... 破片資料であるが、数少ない共伴例なので、参考としてのせる。

※3... ※2と同じ。

表1 後北C2・D式、「モヨログループ」、「北大I式」の諸属性

のうち②「後北C2・D式にふるわず北大式に主体的にみられるもの」を備える土器を出土した土坑が多く検出されている(図11-2～6)。このうちE-7遺構から出土した土器は、すべて属性②を備える一方で、「北大I式」に特徴的な微隆起線文と帯縄文を幾何学的に組み合わせる胴部文様構成をとっている。柏木B遺跡66号土坑墓出土土器にも、属性①がみられない(図11-1)。少なくともこれらの土器と、先にみたワッカオイ地点D地区の土器との型式的差異ははっきりしている。すなわち、「北大I式」では、属性①が消滅してしまっている可能性が高いと考えられるのである。このように、「属性①の有無」という差異を重視するならば、後北C2・D式とは異なるものとして、北大式の最初期を認定し得る可能性が出てくる。その場合、従来の「北大I式」認定の根拠が拡大されることになる。

実は、このように「北大I式」の内容を拡大することで、先にみたユカンボシC15遺跡F-1における「後北C2・D式」と「北大I式」の共伴という事例を(図7)、矛盾なく説明することが可能になるのである。「後北C2・D式」とされた土器をみると、属性の大半が②の特徴で占められていることがわかる(表1)。ワッカオイ地点D地区の後北C2・D式と異なるのは明らかであろう。特に、「口唇部下の貼付文なし」「体部下半の縦走する帯縄文なし」の2属性を併せもつ点が重要で、この

北大式土器の型式編年

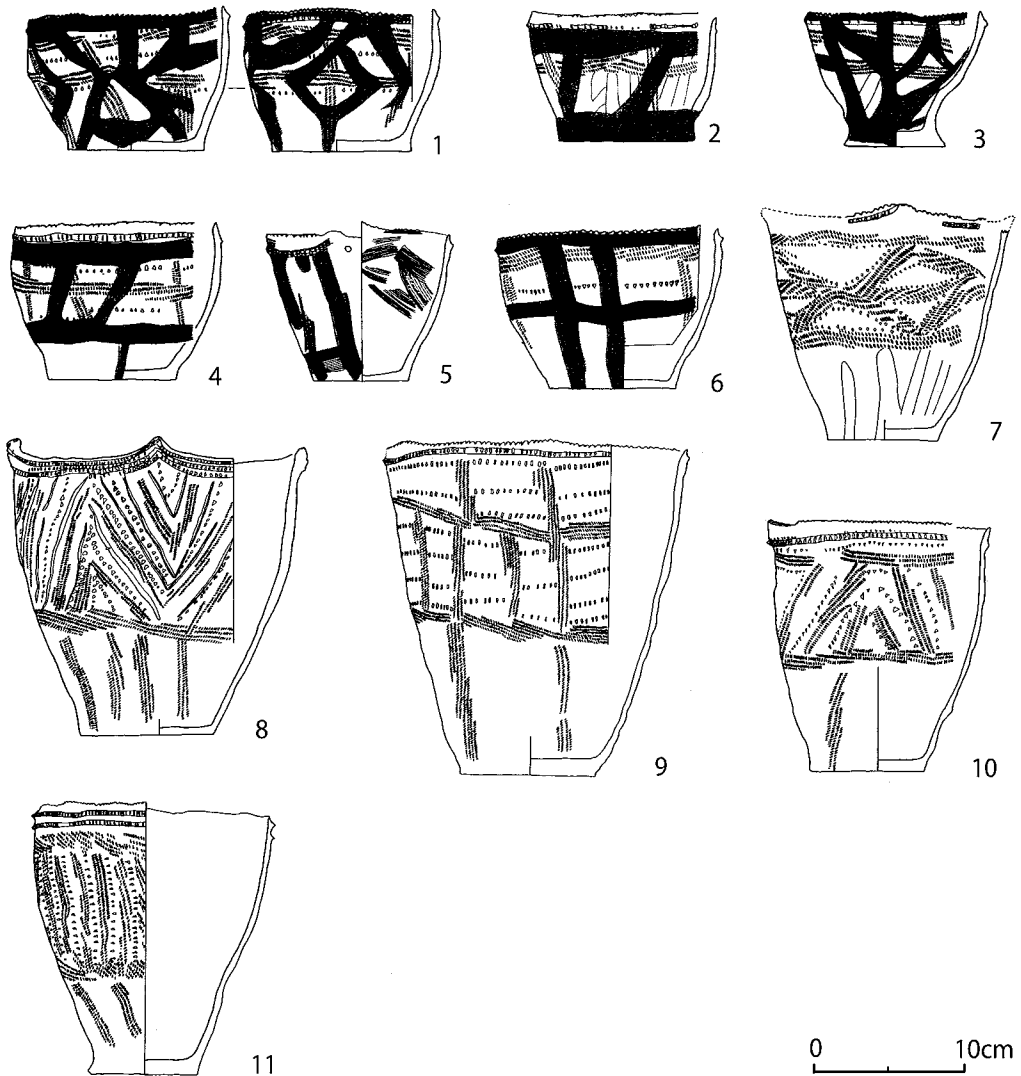


図10 八幡町遺跡ワッカオイ地点D地区出土土器
 1～6. 第20号土壙墓；7. 第2号土壙墓；8. 第25号土壙墓
 9. 第21号土壙墓；10. 第14号土壙墓；11. 第11号土壙墓

組み合わせは後北C2・D式ではなく北大式にみられ、型式細別の明確な指標となり得るものである。すなわち、上記のように属性①の消滅、特に「口唇部下の貼付文」と「体部下半の縦走る帯縄文」の①から②への交替を根拠にするならば、これら2個体は、ともに北大式に属させることができるわけである。この例は、「突瘤文の出現」といった「単一要素の消長」ではなく、「複数要素の交替」に型式細別の根拠をもたせるほうが、資料の実態に即した型式設定をおこないやすいことを示している。また、後北C2・D式と北大式の差異は、口縁部文様にかぎっていえば、「口唇部下の貼付文

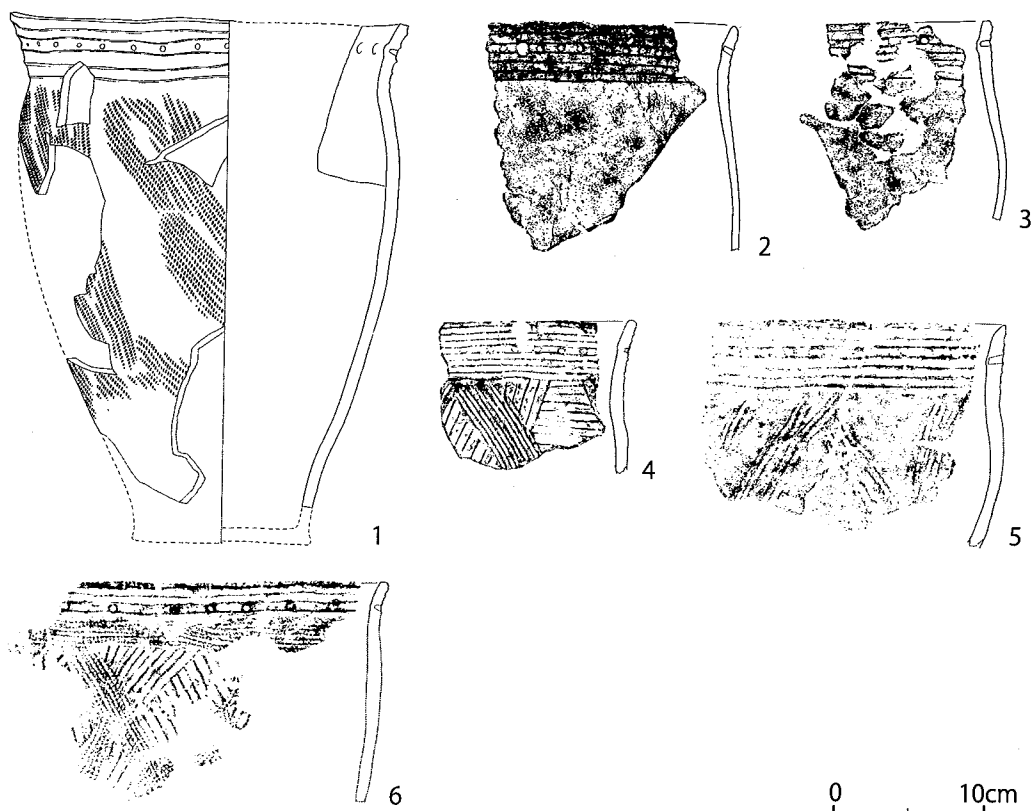


図 11 吉井の沢 1・柏木 B 遺跡出土土器

1. 柏木 B 第 66 号土壙；2. 吉井の沢 1 P-174；3. 同 P-197；4・5. 同 E-13；6. 同 E-7

の消失」によく反映されている点にも注目しておきたい（表 1）。北大式には突瘤文をもたない資料が普通に存在していることを考慮すると、従来のような「突瘤文の出現」のみに注目した型式区分は、資料の実態に即さない危険があるのは明白であろう。⁹⁾ このことも、筆者が型式設定にあたり、「複数要素の交替」を重視する所以の一つである。

さて、以上の点を踏まえつつ、あらためて S153 遺跡第 774 号ピットから出土した資料をみてみよう（図 6）。ワッカオイ地点 D 地区から出土した後北 C2・D 式Ⅲ期の資料と比べると、大半の属性が②だという点で違いはあるが、口唇部下の貼付文を有するという点では、北大式に位置づけた吉井の沢 1 遺跡 E-7 やユカンボシ C15 遺跡 F-1 の両資料とも異なる（表 1）。すなわち、これらは「北大 I 式」の内容を拡大してもなお、両型式の中間的な様相を示すのである。このことから、「モヨログループ」は、独立した時間軸として設定できないことがわかる。口唇部下の貼付文が北大式には認められないことを重視し、後北 C2・D 式に含めておくのが妥当であろう。「モヨログループ」の性格については、後節で触れることにする。

以上の検討から、道央部の後北 C2・D 式から北大式への変遷は、次のように時間的に分けられる。

- ① 後北 C2・D 式末期…熊木編年後北 C2・D 式Ⅲ期および「モヨログループ」のうち、「口唇部下の貼付文」「体部下半の縦走する帯縄文」のどちらか一方あるいは両方を備えるもの
- ② 北大式初期…吉井の沢 1 遺跡 E-7・ユカンボシ C15 遺跡 F-1 出土土器など（型式内容の詳細は次節で検討）

2-3. 出土状況からの検討

先述のとおり、八幡町遺跡ワッカオイ地点 D 地区の遺構群では、後北 C2・D 式Ⅲ期の資料がまとまり、「北大Ⅰ式」を伴っていない点が注目される。同遺跡の A 地区・C 地区で北大式の遺構出土例がみられるのとは対照的で、地区別で時期差を有している蓋然性が高い。このような状況から、後北 C2・D 式Ⅲ期と北大式が時間的に分離可能であることを追認できよう。¹⁰⁾

「北大Ⅰ式」と「北大Ⅱ式」の再検討

後北 C2・D 式との境界を認定したところで、以下では北大式を分析していく。

1. 編年の方法

これまで注目されてきた諸要素が、編年を組むうえで重要なのは論を俟たないが、それだけでは細別型式を設定できないことはすでに述べた。そこで本稿では、新旧関係を示すとみられる諸属性をあらたに増やし、まず共伴の確実な遺構一括出土土器にみられる諸属性の連関状況を確認し、型式組列を把握する。次に、個体別の諸属性の排他的な組み合わせや遺構・遺跡での出土状況をもとに、細別型式を設定する。分析の手順は以上ようになる。

厄介なのは、東北地方の土師器をはじめとする隣接型式が及ぼした影響の存在である。北大式を個体別にみると、その様相はきわめて多様であり（上野 1974；西蓮寺 1979）、なかには土師器そのものといってよい器形や器面調整に旧来の縄文や刻線文がつけられる例が普通に存在する。すなわち、一見新旧を示すかのような属性にも、同じ時期の隣接型式からの影響で出現した可能性があり、時期差を示すのか、同時期の地域差を示すのか、判断に苦しむものが多いのである。出現頻度に違いがあるにもかかわらず通時的にみられるハケメ調整痕などは、その最たる例と言えるだろう。

そこで本稿では、「北大式は隣接型式の影響によって個体別に多様化している」という前提を分析の出発点に据えることにする。一時期の北大式の個体同士では隣接型式の影響を強く受けたものもあれば影響の少ないものもある、とみなすのである。この視点に立ち、後北 C2・D 式と北大式双方にみられる要素の新旧関係にかぎって北大式の型式組列を組めば、後北 C2・D 式からの各変遷段階に応じた隣接型式からの影響の有無・度合も同時に把握することが、理論上可能になるはずである。

次に層位学的検証法についてであるが、一般に、北大式を出土する遺構は、墓や焼土といった小

規模で出土土器の一括性を捉えにくいものが多く、良好な層位事例に乏しいとされる。しかし、これから検討する北大式各細別型式は、それぞれ異なる遺跡でまとまって出土する状況を指摘でき、また、細別した型式のうち時間的に隣接するもの同士が同じ遺跡で主体となって出土する傾向も確認されるので、時期区分や型式組列に関しては、実はかなりの客観性を示すことができるのである。もちろん、遺構での共伴例も、少ないながら重要な細別の根拠となる。これら遺跡・遺構を含めたあらゆる状況から導かれる総体的な根拠によって、本論の細別編年は支えられることになる。

以上の諸点をふまえ、具体的な分析にうつりたい。

2. 属性の抽出

後北 C2・D 式の系統をくむ属性を抽出し型式組列を把握するためには、隣接型式に広く認められる属性を可能なかぎり除いてやる作業が前提として必要である。具体的には、北大式にみられる「突瘤文」「口唇部の面取り」「ハケメ調整」などは、オホーツク土器や東北地方の土師器に広く認められるので、こうしたものを除いた以下の属性が分析の要となる（図 12）。

頸部の有無

- ①なし
- ②あり

器形

- ①胴径 \geq 口径
- ②口径 $>$ 胴径

胴部文様帯の有無

- ①あり
- ②なし

文様要素

- ①帯縄文のみ
- ②微隆起線文＋帯縄文
- ③沈・刻線文＋普通縄文

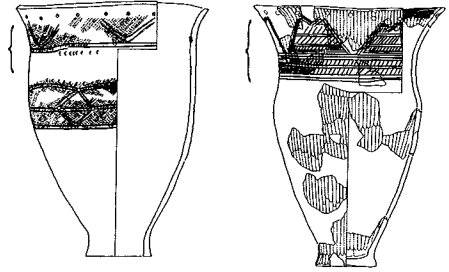
属性は、①から②（③）にむかって新しくなるよう項目を設けている。「文様要素」は、早くから新旧関係を示す属性として注目されてきたものであり（斎藤 1967；松下 1963）、ここでも採用する¹¹⁾。「胴部文様帯の有無」に関しては、近年、時間とともに文様が頸部より上にせりあがるとの指

頸部の有無

① なし

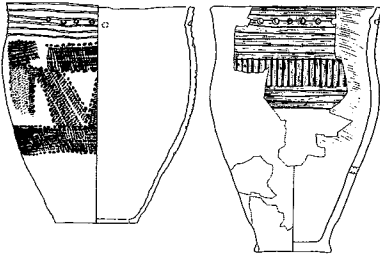


② あり

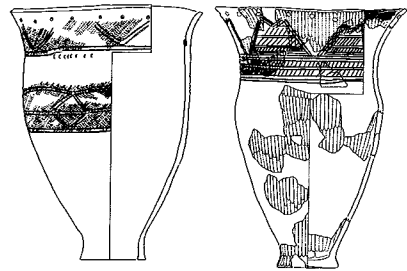


器形

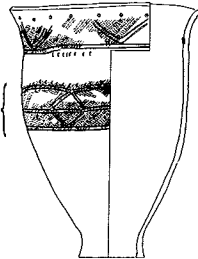
① 胴径 \geq 口径



② 口径 $>$ 胴径

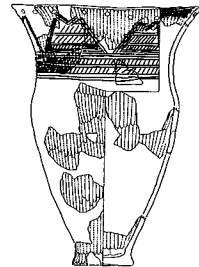


① あり



胴部文様帯の有無

② なし

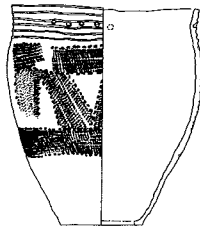


文様要素

① 帯縄文のみ



② 微隆起線文+帯縄文



③ 沈・刻線文+普通縄文

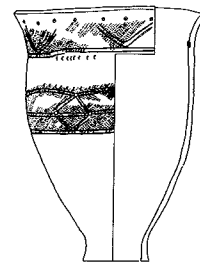


図 12 着目する属性②
「北大Ⅲ式」は後述の分析の都合上掲載している

		頸部の有無	
		なし	あり
口径と胴径の比率	胴径 \geq 口径	17	9
	口径 $>$ 胴径	1	39

		頸部の有無	
		なし	あり
胴部文様帯の有無	あり	16	41
	なし	3	6

		口径と胴径の比率	
		胴径 \geq 口径	口径 $>$ 胴径
胴部文様帯の有無	あり	18	39
	なし	2	7

		頸部の有無	
		なし	あり
文様要素	帯縄文のみ	6	2
	微隆起線文+帯縄文	11	23
	沈・刻線文+縄文	2	22

		口径と胴径の比率	
		胴径 \geq 口径	口径 $>$ 胴径
文様要素	帯縄文のみ	6	2
	微隆起線文+帯縄文	13	21
	沈・刻線文+縄文	3	21

		胴部文様帯の有無	
		あり	なし
文様要素	帯縄文のみ	8	0
	微隆起線文+帯縄文	29	5
	沈・刻線文+縄文	21	3

※ トーンは属性数の逆転を示す

表2 「北大Ⅰ式」「北大Ⅱ式」の属性クロス集計表

摘がある（鈴木 2003；塚本 2007）。筆者も、この属性は、型式細別の際にきわめて有効な指標になると考えているので、本稿の分析で採用する。

3. 属性分析

2007 年度までに刊行された報告書に記載された「北大Ⅰ式」と「北大Ⅱ式」のうち、上記 4 属性をすべて確認できる資料（出土場所は問わない）は、全部で 66 点であった。諸属性をすべてクロス集計したものを表 2 に示した。縦枠は上から下に向かって、横枠は左から右に向かって、それぞれ新しくなるように配置している。

表をみるかぎり、時間とともに排他性をはっきりする組み合わせは存在しないようである。しかしながら、①「頸部の有無」と「口径と胴径の比率」、②「頸部の有無」と「文様要素」、③「口径と胴径の比率」と「文様要素」、の 3 つの組み合わせは、絶対数の少なさに問題を残すが、各表で上から下に、あるいは左から右に向かって数量比が逆転している。すなわち、これらの変化は、時期差を反映している可能性が高いといえる。

そこで、やや強引ではあるが、表 2 を参考に、各組み合わせの変化を次のようにまとめてみよう。

- ①「頸部なし」・「胴径 \geq 口径」の組み合わせ → 「頸部あり」・「口径 $>$ 胴径」の組み合わせ
- ②「頸部あり」「頸部なし」・「帯縄文のみ」「微隆起線文+帯縄文」の各組み合わせ → 「頸部あり」・「沈・刻線文+縄文」の組み合わせ
- ③「胴径 \geq 口径」「口径 $>$ 胴径」・「帯縄文のみ」「微隆起線文+帯縄文」の各組み合わせ → 「口径 $>$ 胴径」・「沈・刻線文+縄文」の組み合わせ

北大式土器の型式編年

型式名	遺構名	頸部の有無・口径と胴径の比率のクロス		頸部の有無・文様要素のクロス		口径・胴径の比率・文様要素のクロス	
		頸部なし・胴径 \geq 口径	頸部あり・口径 $>$ 胴径	頸部ありなし・帯縄文のみ帯縄文+微隆起線	頸部あり・沈+縄文	胴径 \geq 口径 $>$ 胴径・帯縄文のみ帯縄文+微隆起線	口径 $>$ 胴径・沈+縄文
北大Ⅰ式	吉井の沢Ⅰ P-174	●		●		●	
	吉井の沢Ⅰ P-197	●		●		●	
	吉井の沢Ⅰ E-13 (配石)	●	●	●		●	
	ユカンボシ C15 F-1 (焼土)		●	●		●	
	吉井の沢Ⅰ P-238		●	●		●	
	吉井の沢Ⅰ E-7 (一括出土遺物)		●	●		●	
	柏木 B 65 号土坑墓		●	●		●	
	柏木 B 66 号土坑墓		●	●		●	
	M 4 5 9 HE59 (屋外炉)		●	●		●	
	大川 P-202	●		●		●	
北大Ⅱ式	ユカンボシ E 5 GP1		●		●		●
	ワッカオイ地点 C 地区 1 号土坑墓		●		●		●
	ワッカオイ地点 C 地区 3 号土坑墓		●		●		●
	ワッカオイ地点 C 地区 4 号土坑墓		●		●		●
	ユカンボシ E 7 P-46		●		●		●
	高砂 (4) P-245		●		●		●
	ユカンボシ E 7 P-47		●		●		●

表 3 遺構出土「北大Ⅰ式」「北大Ⅱ式」の属性の組み合わせの変化

表 3 は、この 3 つの変化が、遺構出土土器においてどのように確認できるかを示したものである。各組み合わせは、左から右に向かって新しくなるよう配している。

一見して、これら属性の組み合わせの明瞭な排他性を確認することができよう。

4. 出土状況からの検討

まず注目されるのは、古い属性の組み合わせが備わる土器は、吉井の沢Ⅰ遺跡や柏木 B 遺跡などで (図 11)、新しい属性の組み合わせが備わる土器は、八幡町遺跡ワッカオイ地点 C 地区で (図 13)、それぞれ遺構からのまとまった出土をみせる点である。

同じ視点でみるならば、後北 C2・D 式Ⅲ期の土器や遺構がみられた柏木 B 遺跡では、古い属性の組み合わせが備わる土器が主体となる点も参考になろう。ユカンボシ E7 遺跡は、新しい属性

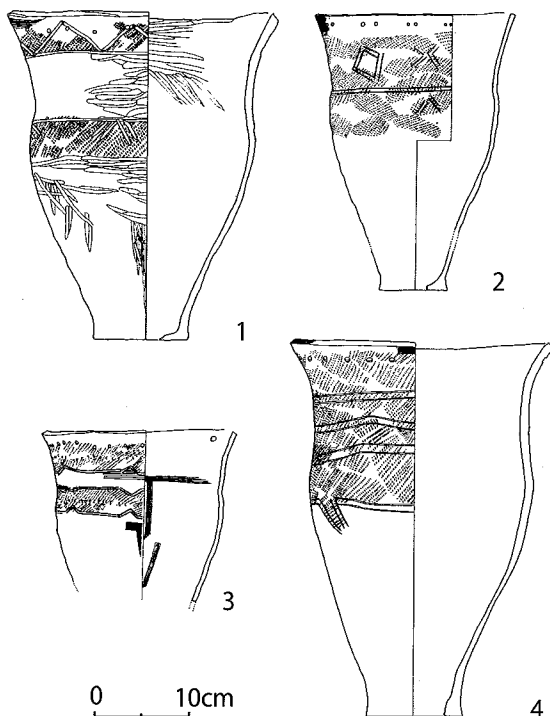


図 13 八幡町遺跡ワッカオイ地点 C 地区出土土器

1. 第 4 号土坑墓; 2. 第 1 号土坑墓; 3. 第 3 号土坑墓; 4. P-14 グリッド

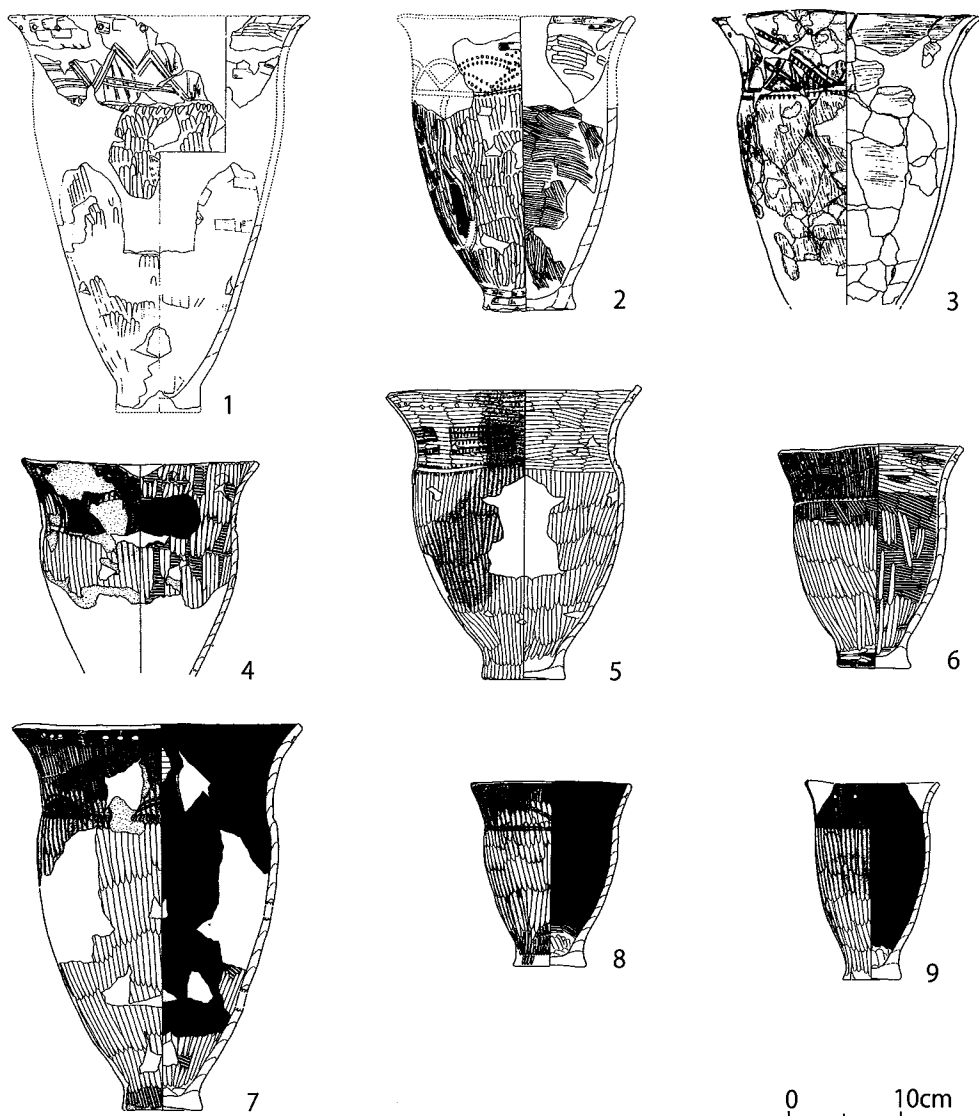


図 14 「北大Ⅲ式」の諸例

1・2. 蘭島 D 地点；3. ユカンボシ E7；4～9. 西島松 5

の組み合わせが備わる土器が後述する北大式の新しい段階の土器とともに出土している一方、後北 C2・D 式Ⅲ期の土器や古いほうの土器が出土していないという点で重要である。また、古いほうに当てはまるユカンボシ C15 遺跡 F-1 や吉井の沢 1 遺跡 E-7 出土土器は、先にみたように後北 C2・D 式との型式的つながりが強く、土器を個別別にみても、いま述べた遺跡における出土傾向との矛盾はない。

以上から、上にみた古いほうの土器と新しいほうの土器は、出土状況からみて新旧関係を示すことがわかる。ただし、余市町大川遺跡（余市町教育委員会 2000）GP-102 出土土器のように、表 3

に示した組み合わせをもたない例がある点には注意する必要がある。これは、表2のトーンで示した以外の属性の組み合わせをもつ例に相当している。すなわち、表3にみられた明瞭な排他性が、こうした組み合わせをもつ土器の遺構出土例が「たまたま大川 GP-102 だけだった」ということにより来する見かけ上のものにすぎない可能性もないわけではないのである。とはいえ、いまみた2者の土器の型式的差異の大きさが明白である点や、後述する東北地方での北大式の出土状況のあり方を考慮するならば、やはり細別できる蓋然性はきわめて高いと筆者は考える。このことから、古いほうの土器を北大Ⅰ式、新しいほうの土器を北大Ⅱ式として再定義する。¹²⁾

「北大Ⅲ式」の再検討

「北大Ⅲ式」は、北大Ⅱ式に共伴する場合もあれば(図3)、単独で一括出土する場合もあり、それ自体が時期差を有する可能性をもつ。ここでは「北大Ⅲ式」細分の可能性を探りつつ、北大Ⅱ式との対比を試みる。

ユカンボシ E7 遺跡、恵庭市西島松 5 遺跡(北海道埋蔵文化財センター 2003a)、小樽市蘭島遺跡 D 地点(小樽市教育委員会 1992a) などでは、まとまった量の「北大Ⅲ式」が出土している(図14)。みると、文様帯は頸部より上にせりあがり、胴部以下が無文になっている。一方、ユカンボシ E5 遺跡 GP1 で北大Ⅱ式に共伴した「北大Ⅲ式」には胴部文様帯がある(図3上)。このことから、「北大Ⅲ式」は胴部文様帯の有無によって時期差を判断できる可能性が高い。「北大Ⅲ式」に後続する擦文土器にはほぼ例外なく胴部文様帯がないことから、「胴部文様帯あり→なし」という変遷順序には妥当性がある。

出土状況はどうであろうか。先の3遺跡では、かなりの数の北大式期の土壌墓が検出されたにもかかわらず、胴部文様帯のない「北大Ⅲ式」が、北大Ⅱ式や胴部文様帯のある「北大Ⅲ式」と共伴した事例が一つもない。このことが偶然とは考えにくいであろう。また、遺跡単位でみた場合でも、胴部文様帯のない「北大Ⅲ式」に比べ、後2者の出土点数は圧倒的に少ない傾向を確認できる。

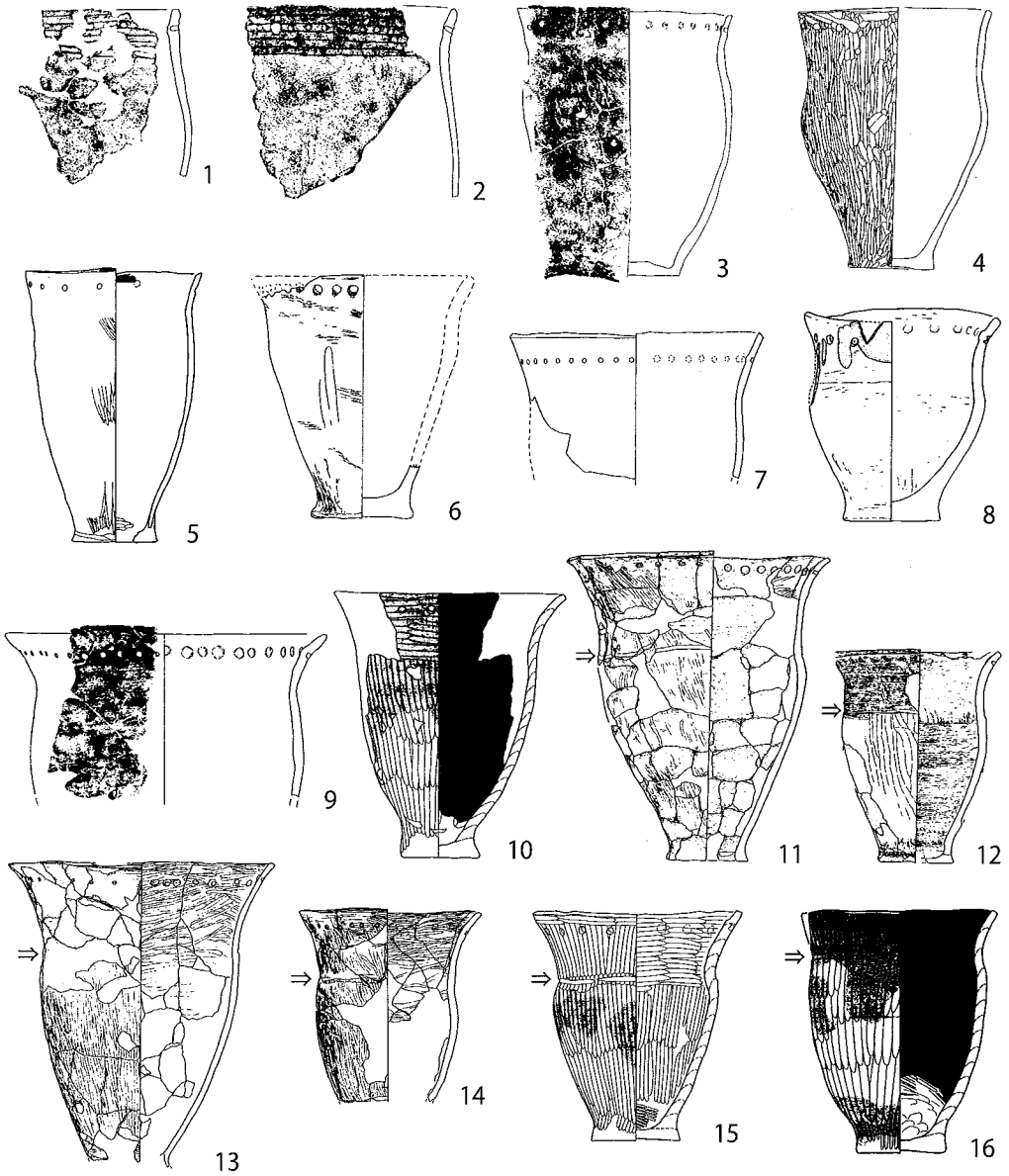
以上から、「北大Ⅲ式」は型式学的にも出土状況からも、2つの時期に分けられることが明らかである。ユカンボシ E5 遺跡 GP1 での共伴例を重視し、胴部文様帯のあるものを北大Ⅱ式、ないものを北大Ⅲ式に分けるのが妥当であろう。

「円形刺突文土器」の編年的位置づけ

ここでは有文甕形土器の分析結果に依拠し、「円形刺突文土器」(図15)の編年的位置づけを試みる。

1. 「円形刺突文土器」の属性

これまでの属性分析結果を鑑み、「円形刺突文土器」の型式組列を導くために以下の属性に着目



⇒ … 頸・胴部の「区画」を示す

図 15 「円形刺突文土器」

1～4…A群；5～10…A'群；11～16…B群

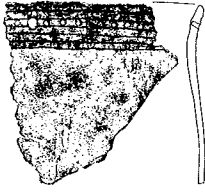
1～3・9. 吉井の沢1；4. 大川；5. 八幡町ワッカオイ地点C地区

6. ウサクマイN；7・8. カリンバ2；10・15・16. 西島松5；11～14. ユカンボシE7

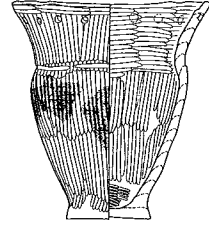
縮尺不同

文様要素

① 突瘤文+微隆起線文

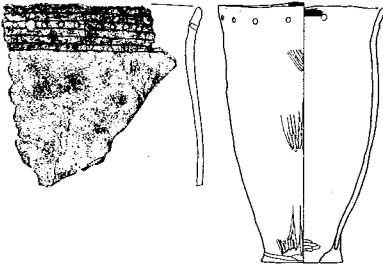


① 突瘤文のみ

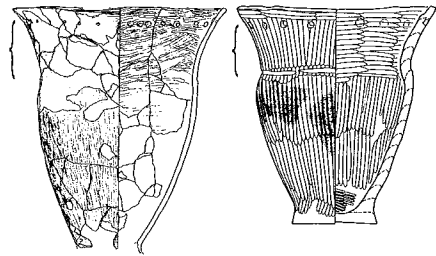


頸部の有無

① なし

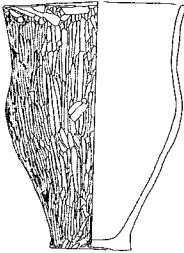


② あり

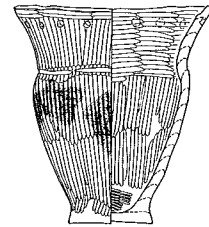


器形

① 胴径 \geq 口径

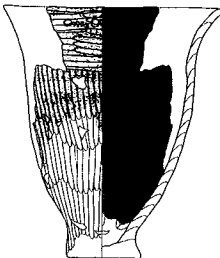


② 口径 $>$ 胴径



頸・胴部の区画の有無

① なし



② あり

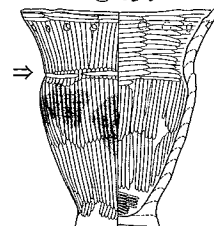


図 16 着目する属性③

する（図 16）。

文様要素

- ① 突瘤文 + 微隆起線文
- ② 突瘤文のみ

頸部の有無

- ① なし
- ② あり

器形

- ① 胴径 \geq 口径
- ② 口径 $>$ 胴径

頸・胴部の区画の有無

- ① なし
- ② あり

丸数字は① → ②に向かって属性が新しくなるように並べている。たとえば「文様要素」では、微隆起線文は北大Ⅰ式有文甕形土器にみられる古手の属性であるし、「頸部なし」も後北 C2・D 式に普遍的にみられる古手の属性である。一方、古手の擦文土器では頸部と胴部の境に段や沈線などの一種の「区画」が普遍的にみられることから、「区画あり」を新手の属性とみなすことができる。

2. 「円形刺突文土器」の編年

表 4 に、遺構から出土した「円形刺突文土器」が有する属性を示し、各属性が① → ②となるような順に資料を配してみた。吉井の沢 1 遺跡 P-174・197 の 2 資料は、すべての属性が①となり古い様相を示している。これとは対極に、すべての属性が②となる資料はユカンボシ E7 遺跡や西島松 5 遺跡から多量に出土している。これらは型式的な排他性が強く、遺跡単位でみてもまとまりを確認できることから、時期差をもつと考えてよいだろう。しかし、属性①と②を併せもつ資料も多く存在する。さしあたり、互いに排他的なまとまりを示す前 2 者を A 群・B 群と仮称し、これを起点にその他の資料を分析していくことにする。

まず、B 群とした江別市萩ヶ岡遺跡（江別市教育委員会 1982）墓 305、およびユカンボシ E7 遺跡 P-28 出土の「円形刺突文土器」は、それぞれ北大Ⅲ式有文甕形土器に共伴しているので（図 17）、この時期に位置づけられるのは間違いない。したがって、両群の属性の排他性から考えて、A 群が北大Ⅲ式以前に位置づけられるのは確実であろう。ただ、こちらの編年的位置づけはきわめ

北大式土器の型式編年

段階	遺跡・遺構名	文様要素		頸部の有無		頸・胴部の区画の有無		器形		備考
		微隆起線文+円形刺突文	円形刺突文のみ	なし	あり	なし	あり	胴径 \geq 口径	口径 $>$ 胴径	
A 群	吉井の沢 1 P-174	●		●		●		●		
	吉井の沢 1 P-197	●		●		●		●		
	吉井の沢 1 P-85		●		●	●		●		
	大川 GP-50			●		●		●		
	ワッカオイ地点 C 地区 H-5 グリッド		●	●		●			●	
A' 群	ウサクマイ N 8-イ区小ピット		●	●		●			●	
	吉井の沢 1 P-237				●					
	カリンバ 2 第 40 号土坑墓		●	●		●			●	
	カリンバ 2 第 54 号土坑墓		●	●		●			●	
	C507 PT01			●		●			●	
	ユカンボシ E7 P-46		●	●		●			●	北大Ⅲ式共伴
	ユカンボシ E7 P-48		●	●		●			●	
	西島松 5 P55		●	●		●			●	
	大川 GP-128		●	●		●			●	
	萩ヶ岡墓 305		●	●		●			●	北大Ⅲ式共伴
B 群	ユカンボシ E7 P-21		●	●		●			●	
	ユカンボシ E7 P-27		●	●		●			●	
	ユカンボシ E7 P-28		●	●		●			●	北大Ⅲ式共伴
	ユカンボシ E7 P-32		●	●		●			●	
	ユカンボシ E7 P-36		●	●		●			●	
	ユカンボシ E7 P-37		●	●		●			●	
	西島松 5 P1		●	●		●			●	
	西島松 5 P39		●	●		●			●	
	西島松 5 P73		●	●		●			●	
	西島松 5 P131		●	●		●			●	

表 4 「円形刺突文土器」の諸属性

て困難である。先に述べた、微隆起線文をもつ吉井の沢 1 遺跡の 2 資料以外には、編年対比の根拠がないからである。このことから、A 群は幅をとって北大Ⅰ式～Ⅱ式に含めておくことにしたい。

3. ユカンボシ E7 遺跡 P-46 出土土器の検討

いまひとつ、「円形刺突文土器」のうち編年的位置づけの困難な資料が存在する。それは、表 4 で A' 群とした、「頸・胴部の区画なし」以外の属性がすべて②になる資料である。「頸・胴部の区画」は、本来東北地方の住社式で出現したのち栗圀式に盛行し（伊藤 1989）、北大式のある時期にヨコから入ってくる性質のもので、「円形刺突文

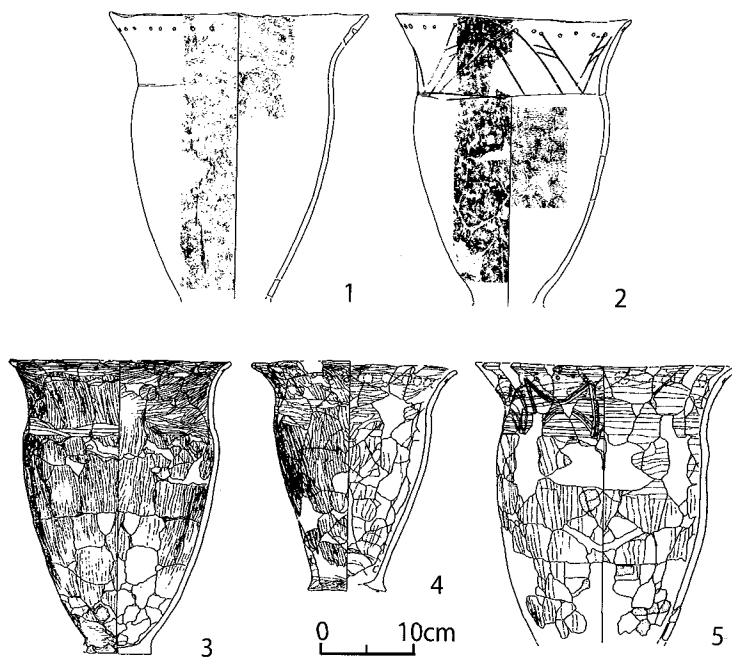


図 17 「円形刺突文土器」B 群と北大Ⅲ式有文甕形土器の共伴例
上段：萩ヶ岡墓 305；下段：ユカンボシ E7 P-28
1・3・4 が「円形刺突文土器」B 群；2・5 が北大Ⅲ式有文甕形土器

土器」の型式組列だけでは時期差と地域差を判断できない属性である。すなわち、B 群との時期差を示すのか、東北地方の土師器からの影響の受容差による B 群内での地域差を示すのかが明らかでないのである。

この問題を解く鍵は、もう一つの「北大Ⅱ式」と「北大Ⅲ式」の共伴例であった、ユカンボシ E7 遺跡 P-46 出土土器にある（図 3 下）。このうち「北大Ⅲ式」とされたものは「円形刺突文土器」A' 群に相当する。しかし、「北大Ⅱ式」とされたものは、普通縄文こそ有するものの、胴部文様帯をもたないという点で、先に検討した北大Ⅱ式の定義からはずれるものである。筆者は、これまでの出土事例や型式組列を積極的に評価し、縄文の有無より胴部文様帯の有無のほうが型式細別の指標として有効だと考える。したがって、この「北大Ⅱ式」は、胴部文様帯をもたないという特徴から北大Ⅲ式に属させておく¹³⁾。先にみた、ユカンボシ E7 遺跡で北大Ⅲ式がまとまって出土するという事例にも抵触しないし、このような土器が胴部文様帯をもつ土器と共伴した例が一つもないという点で、資料の実態に即しているといえる。このように考えれば、「円形刺突文土器」A' 群は、北大Ⅲ式に含めることができよう。

以上、「円形刺突文土器」の編年の位置づけを考察した。まとめると以下ようになる。

「円形刺突文土器」A 群…北大Ⅰ式～Ⅱ式に含まれる

「円形刺突文土器」A' 群・B 群…北大Ⅲ式に含まれる

出土事例に恵まれておらず、有文甕形土器にくらべ編年の精度は落ちるが、ひとまずこのように編年を対比しておく。詳細な検討は、確実な共伴事例の増加を待ちたい。

注口土器・片口土器の編年の位置づけ

ここでは、甕形土器の編年に依拠しつつ、注口土器と片口土器の時間軸を設定する。

1. 注口土器の編年

遺構名	文様の有無	上面観	口縁部形態	備考
吉井の沢 1 P-211	無	不整円・角ばり	波状口縁	Ⅱ式？口縁部片と共伴
吉井の沢 1 P-228	無	不整円・角ばり	波状口縁	Ⅰ式口縁部片を伴うが、細片のため共伴かどうかは疑わしい
	無	不整円・角ばり	波状口縁	
吉井の沢 1 P-230	無	不整円・角ばり	波状口縁	
大川 P-202	櫛引文		平縁	Ⅰ式（櫛引文）が共伴
カリンバ 2 33 号土坑	無		平縁	
カリンバ 2 55 号土坑	無	円	平縁	
天内山 1 号墳墓	列点文		平縁	
西島松 5 P70	口唇部刻み	円	平縁	Ⅲ式ないし同時期の無文甕が共伴
西島松 5 P98	無	円	平縁	Ⅲ式ないし同時期の無文甕が共伴

表 5 遺構出土注口土器の諸属性

北大式土器の型式編年

表 5 に、遺構から出土した注口土器の特徴を示した。口縁部が打ち欠きされている例ははずしてある。

みると、北大Ⅰ式に共伴するものは口縁部形態が 4 単位の波状のものや上面観が不整円形で角張った形

遺構名	文様の有無	上面観	口縁部形態	備考
ユカンボシ C15 焼土	口唇部刻み	不整円・角ばり	平縁	
大川 GP-99	無	円	平縁	
ユカンボシ E 7 P-21	無	円	平縁	Ⅲ式共伴
ユカンボシ E 7 P-32	無	円	平縁	Ⅲ式共伴
ユカンボシ E 7 P-48	無	円	平縁	Ⅲ式共伴
蘭島 D 地点 81-11A 土坑	無	円	平縁	Ⅲ式共伴
ウサクマイ A 墓坑 63-5	無	円	平縁	

表 6 遺構出土片口土器の諸属性

を示す特徴が認められる。甕形土器と、微隆起線文などの文様や文様割りつけを共有するものもあり、こうした例は時間的に古く位置づけることができそうである。一方、北大Ⅲ式に共伴するものは口縁部形態に平縁のものが多く、上面観は円形・楕円形のみが認められる。こうした特徴をもつ例を新しく位置づけることができそうである（鈴木 2003）。

以上から、注口土器は型式的特徴から 2 つに分けられる。古いほうは北大Ⅲ式甕形土器と、新しいほうは北大Ⅰ式甕形土器と、それぞれ 1 つの遺跡で排他的な出土状況を示しているので、北大Ⅱ式期に境界があると考えることができる。

2. 片口土器の編年

表 6 に、遺構から出土した片口土器の特徴を示した。型式的特徴の差を示す例が少なく決め手が欠いている。やむを得ないので、注口土器の型式的特徴との類似性や甕形土器で確認できた出土状況からの知見を参照する。

1 例ではあるが、ユカンボシ C15 例は上面観が不整円形で、注口土器の古いほうと類似した特徴をもつ。この遺跡の甕形土器は北大Ⅰ式が主体となるので、こうした特徴をもつ例を古く位置づけることができそうである。残りはすべて上面観が円形・楕円形であり、北大Ⅲ式甕形土器との共伴例もある。

以上から、型式的には上面観の違いをもって 2 つに分けておくのが、現時点では妥当であろう。なお、青森県天間林村（現七戸町）森ヶ沢遺跡（阿倍編 2008b）15 号墓からは、上面観が円形で北大Ⅰ式に特有の微隆起線文をもつ片口土器が、南小泉Ⅱ式相当の赤彩坏や須恵器蓋とともに副葬されている。この遺跡から出土したほかの片口土器 2 点は上面観が不整円形となるものであり、両者が時期差をもつのかははっきりしない。しかし、後述するように、北大Ⅱ式が南小泉Ⅱ式期にまでさかのぼることはないと考えられるので、ここではすべてを北大Ⅰ式とみなしておきたい。片口土器の属性は、上面観が不整円形から円・楕円形へ、文様があるものからないものへ、それぞれ非常に緩やかに変化していくものと推察される。

道央部における北大式土器の型式細別のまとめ

ここまでのまとめとして、全器種の編年を総合する。表 7 に、どの時期にこういった属性が備わ

表7 北大式細別型式と諸属性

なお、甕形土器の各細別型式を、従来の編年に対応させると次のようになる。

北大Ⅱ式…「北大Ⅱ式」「北大Ⅲ式」のうち胸部文様帯があるものに対応。また、「円形刺突文土器」A群に対応(図19)

以上の分析結果は、先学によって注目されてきた「微隆起線文から沈線文へ」「縄
文ありから縄文なしへ」という文様要素からみた型式組列を尊重しつつ、従来の
型式内容をあらためた形になる。しかしながら、このようにあらためることで、
従来の編年が、各出土状況に抵触しない時期区分として機能し得るということが
わかりいただけるかと思う。また、「口唇部下の貼付文・体部下位の縦走する
縄文の消失」や「器形と胴部文様帯の相関性」などに型式的差異がはっきり反
映されるということ、先学によって注目されてきた「突瘤文の出現」「縄文施文
の衰退」「器面の無文域の増加」「頸部の発達」といった個別の変化は、1細別型
ごとに起こるのではなく、隣接する細別型式をまたいでゆるやかに進行するこ
うなことなど、あらたな知見も提示することができた。

ここでは、道央部以外の地域で、以上のような型式細別が成り立つかどうかを検討してみたい。

表 8 に、道央部の土器によって示された細別型式が、道東部の遺構でどのよう

北大式土器の型式編年

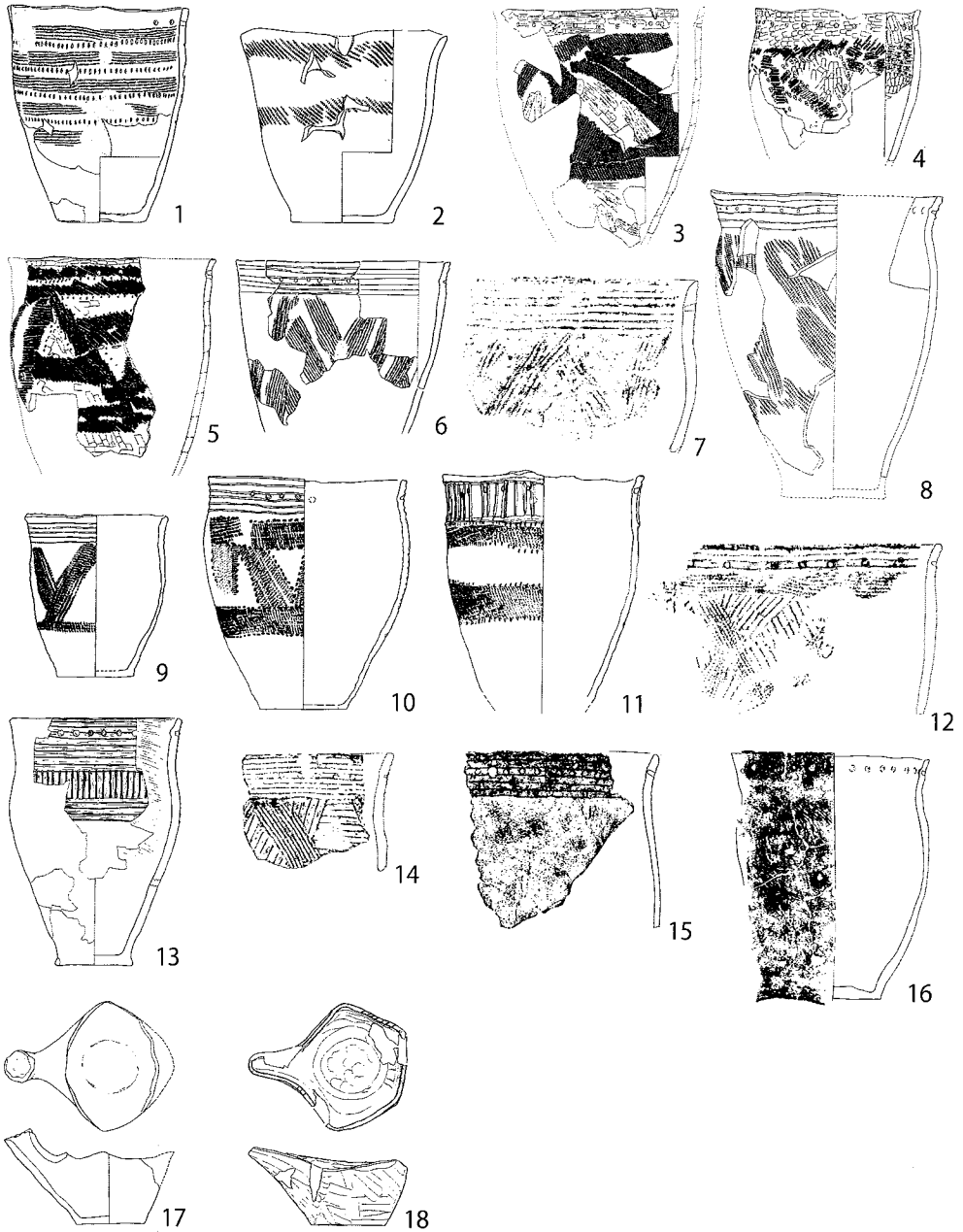


図 18 北大Ⅰ式

1・6・18. ユカンボシ C15；2・8. 柏木 B；3・4. フゴッペ洞窟；5. 蘭島餅屋沢 2
7・12・14～17. 吉井の沢 1；9～11. ポプラ並木東地区；13. ユカンボシ C9

縮尺不同

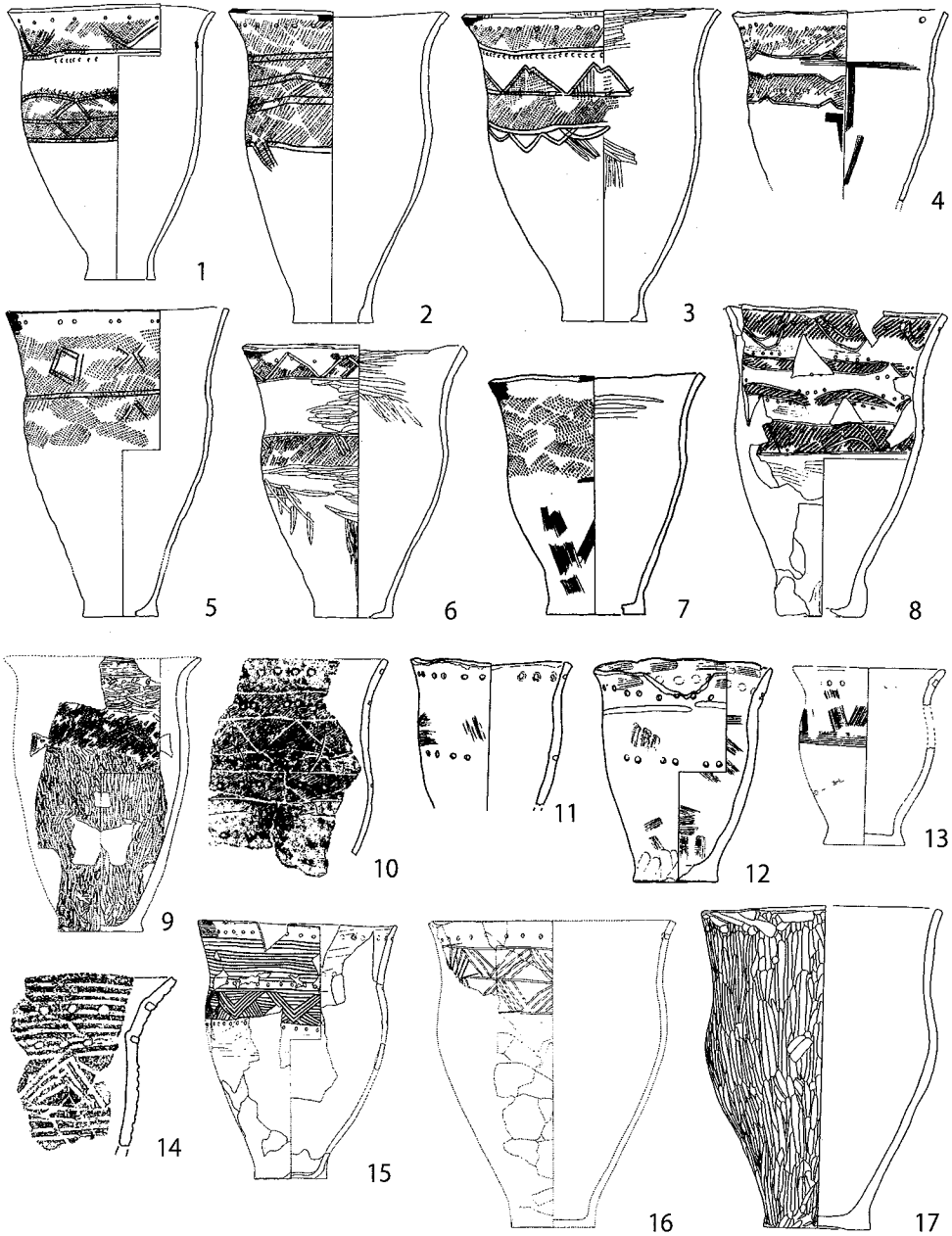


図 19 北大Ⅱ式

1～7. 八幡町ワッカオイ地点 C 地区；8・12. ユカンボシ E5；9. 蘭島 A 地点；10・11. 高砂
13. タブコブ；14. 静川 B 地区；15. K113 北 34 条地点；16. ウサクマイ C 地点 C 地区；17. 大川

縮尺不同

北大式土器の型式編年

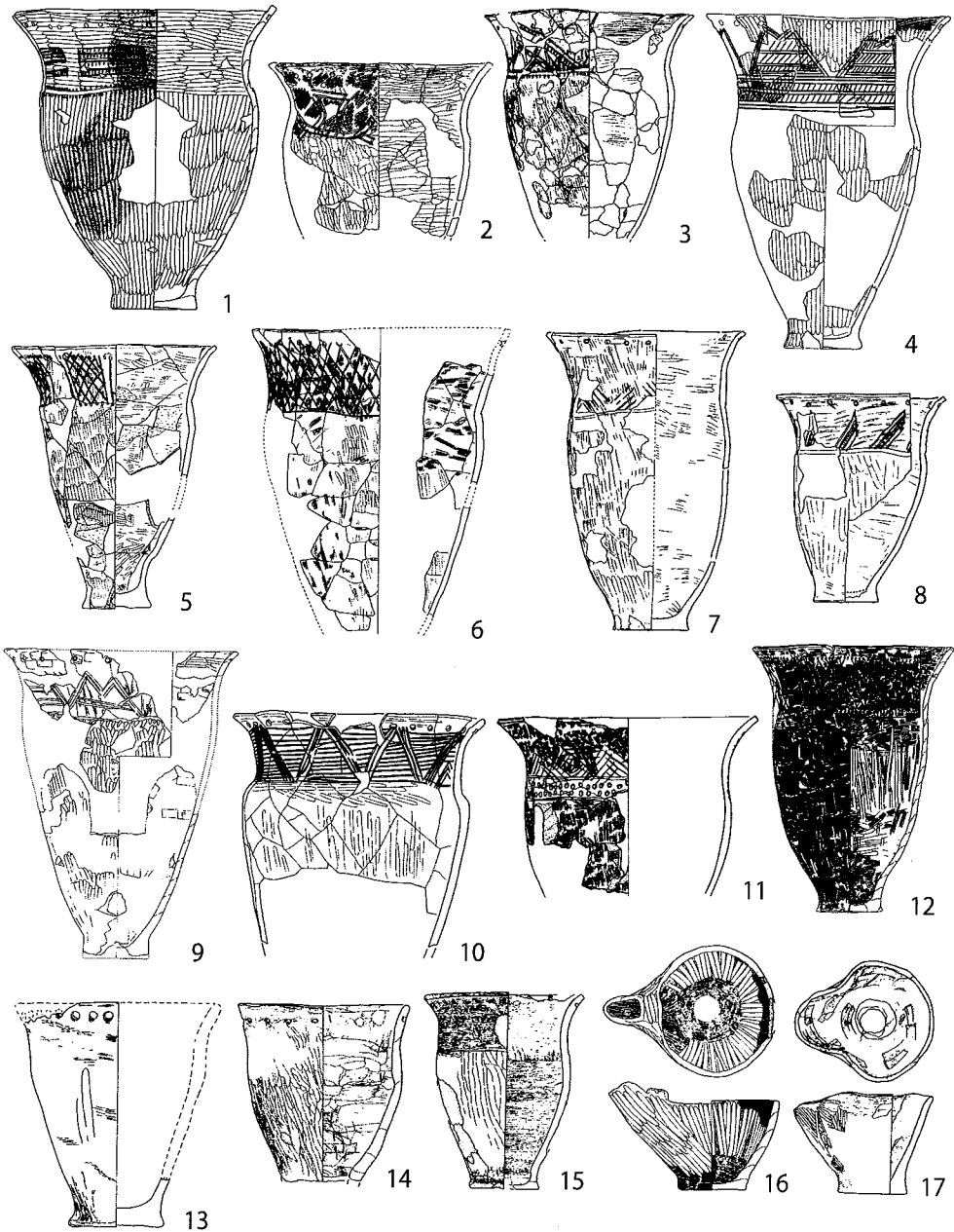


図 20 北大Ⅲ式

1・16. 西島松 5; 2・3・14・15・17. ユカンボシ E7; 4. 西島松 9; 5・6. 中島松 6; 7・8. 美々 8
9. 蘭島 D 地点; 10. ユカンボシ E9; 11. 恵庭公園; 12. 蘭島 B 地点; 13. ウサクマイ N

縮尺不同

遺構名	時期		
	I 式	II 式	III 式
ノトロ岬 59 号土坑		●	
ノトロ岬 30 号土坑		●	
ノトロ岬 35 号土坑		●	
ノトロ岬 40 号土坑		●	
ノトロ岬 41 号土坑		●	
ノトロ岬 48 号土坑		●	
ノトロ岬 56 号土坑		●	
ノトロ岬 61 号土坑		●	
ノトロ岬 54 号土坑			●
十勝太若月土坑 32			●
十勝太若月土坑 68			●
下鑑別 3 号堅穴			●

表 8 北大式細別型式の道東部における遺構出土状況

に出土しているかを示した。

例数は少ないものの、各細別型式は排他的な出土状況を示す。すなわち、音別町（現釧路市）ノトロ岬遺跡（音別町教育委員会 1984）では、北大Ⅱ式とⅢ式が遺構から出土しているが（全体としてⅡ式が圧倒的に多くⅢ式は少ない）、Ⅰ式はまったく出土していない。浦幌町十勝太若月遺跡（浦幌町教育委員会 1975）では、Ⅲ式のみが遺構あるいは遺跡から出土している。弟子屈町下鑑別遺跡（弟子屈町教育委員会 1971）では、住居址から北大Ⅲ式が出土しており、そこからⅠ式・Ⅱ式がまったく出土していないという点で重要である。これらの事例からだけ

でも、各細別型式が時期を違えていることをはっきり読みとることができよう。

遺構出土とみなせるのは以上であるが、ほかに注目できるものとして、常呂町（現北見市）トコロチャシ跡遺跡（東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設 2001）と常呂川河口遺跡（常呂町教育委員会 1996, 2000, 2002, 2004, 2005, 2006；北見市教育委員会 2007）の事例が挙げられる。前者では、後北 C2・D 式と北大Ⅰ式・Ⅱ式が出土している一方で、Ⅲ式は 1 点も出土していない（後北 C2・D 式が圧倒的に多くⅠ式・Ⅱ式は数点である）。また後者では、全型式が出土しているものの、その数は北大Ⅰ式がⅡ式やⅢ式にくらべ圧倒的に多い。これらの事例も、本稿で提示した細別型式同士の時期差や型式組列に対する傍証となろう。

なお、最近資料が紹介された釧路町床丹遺跡（笹田他 2007）も、道東部で北大式がまとまって出土した事例として注目すべきであろう。主体となるのは北大Ⅰ式・Ⅱ式であり、Ⅲ式は見当たらないようである。わずかな地点でおこなわれた発掘であり、資料にバイアスがかかっている可能性を考慮する必要はあるが、北大式そのものの数が少ない道東部にあっては大いに参考となろう。

2. 東北地方の北大式土器

東北地方における後北式・北大式研究の蓄積は厚く¹⁴⁾、その存在が列島北部の考古学と古代史両研究にとって重要な意味をもつと考えられたために、早くから活発な遺跡踏査や資料の紹介がおこなわれてきた（佐藤 1967, 1975, 1983, 1984 他）。東北地方は、北大式の主要な分布圏から外れる地域であるため、安定した組成をなす土師器のなかに北大式が貫入的・客体的に入っているのが通例と考えられており、近年の資料の増加からも、こうした理解は追認されている（阿部 1998）。そしてこのことが、遺跡単位でみた場合の各細別型式の排他的な出土状況を認識しやすくしているのである。ここでは、第三者にも検証可能なよう、北大式の出土状況が明確な遺跡のみを扱うことにする。表 9 に、道央部の土器によって示された細別型式が、東北地方の遺跡でどのように出土しているかを示した。細片のため型式比定の困難なものは除いている。

まず、後北 C2・D 式と北大Ⅰ式の単独出土遺跡が各県でみられる一方で、北大Ⅱ式の単独出土

遺跡は皆無である点が注目される。Ⅱ式は唯一、青森県八戸市田向冷水遺跡（八戸遺跡調査会 2001, 八戸市教育委員会 2006）で後北 C2・D 式Ⅲ期・Ⅰ式とともに出土しているのみであるが、これとて「円形刺突文土器」A 群であり、先述のとおりⅠ式の可能性も残すものである。このように、東北地方の事例からも、先に道央部でみたⅠ式とⅡ式の時期差の妥当性が追認されよう。

土師器との併行関係でいうなら、北大Ⅰ式の単独出土遺跡では、塩釜式から引田式まで出土している一方で住社式が出土していないという点が重要であろう。このことは、東北地方の住社式期までには北大Ⅰ式が終わっていることを物語る。北大Ⅱ式と住社式との共存例は、現状では見当たらない。しかしながら、北大Ⅲ式を出土した岩手県滝沢村高柳遺跡（滝沢村教育委員会 1987）では、栗囲式がその他の時期の土師器を伴わずに出土している。したがって、「北大Ⅰ式の下限＝南小泉Ⅱ式～引田式」「北大Ⅲ式＝栗囲式」という併行関係が導かれることから、北大Ⅱ式を住社式併行と考えることに問題はないことになる。¹⁵⁾

以上、道央部の分析で得られた知見をその他の北大式土器分布圏にも適用した結果、矛盾がないことが明らかになった。

北大式土器の変遷の実態

先にみた「器面の無文域の増加」「頸部の発達」「縄文施文の衰退」の3つは、いずれも北大式になってあらたにみられる現象である。言いかえれば、これらは後北 C2・D 式からは連続しない現象ということになる。また、「突瘤文の出現」も、後北 C2・D 式Ⅲ期以前にはみられない現象である。ということは、後北 C2・D 式Ⅲ期や北大式において自然に起きたのでないかぎり、これら4現象は隣接する土師器やオホーツク土器と深い関係にある、と考えることができる。ここでは、これまでの検討から除いていた隣接諸型式とのヨコの関係を吟味し、北大式の通時的な変遷を、後北 C2・D 式からのタテの系統のみならず、隣接諸型式からのヨコの系統

遺跡・遺跡名	時期				出土状況	東北地方土師器（※1）	東北地方土師器の編年
	後北 C2・D 式	北大Ⅰ式	北大Ⅱ式	北大Ⅲ式			
青森県隠川 (11) 遺跡	●				調査区に存在	同じ調査区から塩釜式相当の土師器が出土している	塩釜式
秋田県永田川 遺跡	●				土壌層	同じ土壌層から塩釜式が出土している	↓
岩手県永田山 遺跡	●				土壌層	同じ土壌層から塩釜式が出土している	南小泉Ⅱ式
宮城県雫 / 泉遺跡	●				住居址・土	南小泉Ⅱ式～園分寺下層式まで連続なく出土している	↓
宮城県清水遺跡	●				住居址・土	生居址床面からは住社式が出土している	引田式
岩手県中平入 遺跡	●	●			住居址・土	塩釜式～引田式と栗囲式が出土している	↓
宮城県伊佐城	●	●			溝		住社式
青森県田向冷水遺跡 2003 年度調査	●	●	●		すべて住居址・土	限定的に住居址・土から南小泉Ⅱ式～引田式相当の土師器が出土している	↓
青森県田向冷水遺跡 2001 年度調査		●	●		住居址・土	住居址床面から引田式相当の土が出土している	栗囲式
青森県桑・沢遺跡		●	●		土壌層	同じ土壌層で南小泉Ⅱ式が共存している	↓
青森県市子 遺跡		●	●		土壌層	同じ土壌層で南小泉Ⅱ式が共存している	園分寺下層式
秋田県宮崎遺跡		●	●		住居址・土	同じ調査区から南小泉Ⅱ式～引田式まで出土している	↓
宮城県木戸町 遺跡		●	●		土壌層	土壌層及び調査区から塩釜式～引田式まで出土している	↓
岩手県鍋倉遺跡			●	●	住居址及び調査区	住居址及び調査区から栗囲式が出土している	↓

※1 … 明らかでないと思われる例は記載していない

表 9 北大式細別型式の東北地方における出土状況

も交えて構造的に捉え、北大式の型式的特質の一端にアプローチしてみたい (図 21)。

1. 突瘤文の性格

北大式にみられる突瘤文は、鈴谷式や十和田式などより北方に分布する土器型式との関係が早くから注目されてきた要素である (石附 1976)。しかし、編年的に併行することはさまざまな事例から確実視されているものの、両者は排他的な分布を示すので、現在でも型式間交渉の実態にアプローチすることは困難である。とはいえ、突瘤文は後北 C2・D 式の末期に忽然と出現し、北大式期をとおして不安定な形で存続することを考慮するならば、やはり北方系の土器型式からの影響を示している蓋然性が高いといえる。北大式を、「隣接型式の影響によって個体別に多様化している」ものとして捉える本稿の立場からすれば、突瘤文をもつ北大式は北方系の土器型式の影響を強く受けたもの、突瘤文をもたない北大式は影響を受けなかったか受けたとしても弱かったもの、とみなす解釈が成り立つ。現時点では、北大式の突瘤文についてこのように考えておきたい。

なお、このような見方にたてば、「モヨログループ」の性格も同様に解釈することが可能になる。すなわち、後北 C2・D 式Ⅲ期のうち、北方系の土器型式の影響をより強く受けたものが「モヨログループ」だったとみなすわけである。

2. 頸・胴部の「区画」の性格

北大Ⅲ式では、「円形刺突文土器」の頸部と胴部の間に段や沈線などの「区画」を施すもの (B 群) と施さないもの (A' 群) が併存している。詳しくは述べなかったが、両者の併存は、有文甕形土器にも同様にみられる。先述のとおり、この「区画」は東北地方の住社式に出現したものであり、栗圀式において普遍的に用いられるようになったものが北大Ⅲ式に取り入れられたものだと考えることができる。そして、先の突瘤文同様に、「区画」のあるものが栗圀式の影響をより強く受けた土器、ないものが影響のより弱い土器だと解釈することが可能である。

この栗圀式からの影響と北大Ⅲ式の胴部文様帯の消滅は、無関係ではあるまい。先学によって注目されてきた「器面の無文域の増加」は、こうした事象が原因の一つであったと考えておきたい。同じことは、「縄文施文の衰退」についてもいえる可能性がある。

3. 北大式の文様帯配置とその変遷

後北 C2・D 式までは、口縁部文様帯と胴部文様帯がはっきり分離しており、口縁部・胴部という器形の部位に応じて文様が割りつけられ文様帯を構成する。

北大Ⅰ式になると、胴下部の文様帯が消失する。しかし、口縁部と胴部 2 帯という後北 C2・D 式の文様帯配置の基本が維持される (図上)。また、器形が「口径 > 胴径」となる土器には短い頸部が作出されるようになるが (図下)、そのような土器でも、口縁部文様帯が頸部に拡大する形で、後北 C2・D 式の文様帯配置がそのまま維持されるようである。

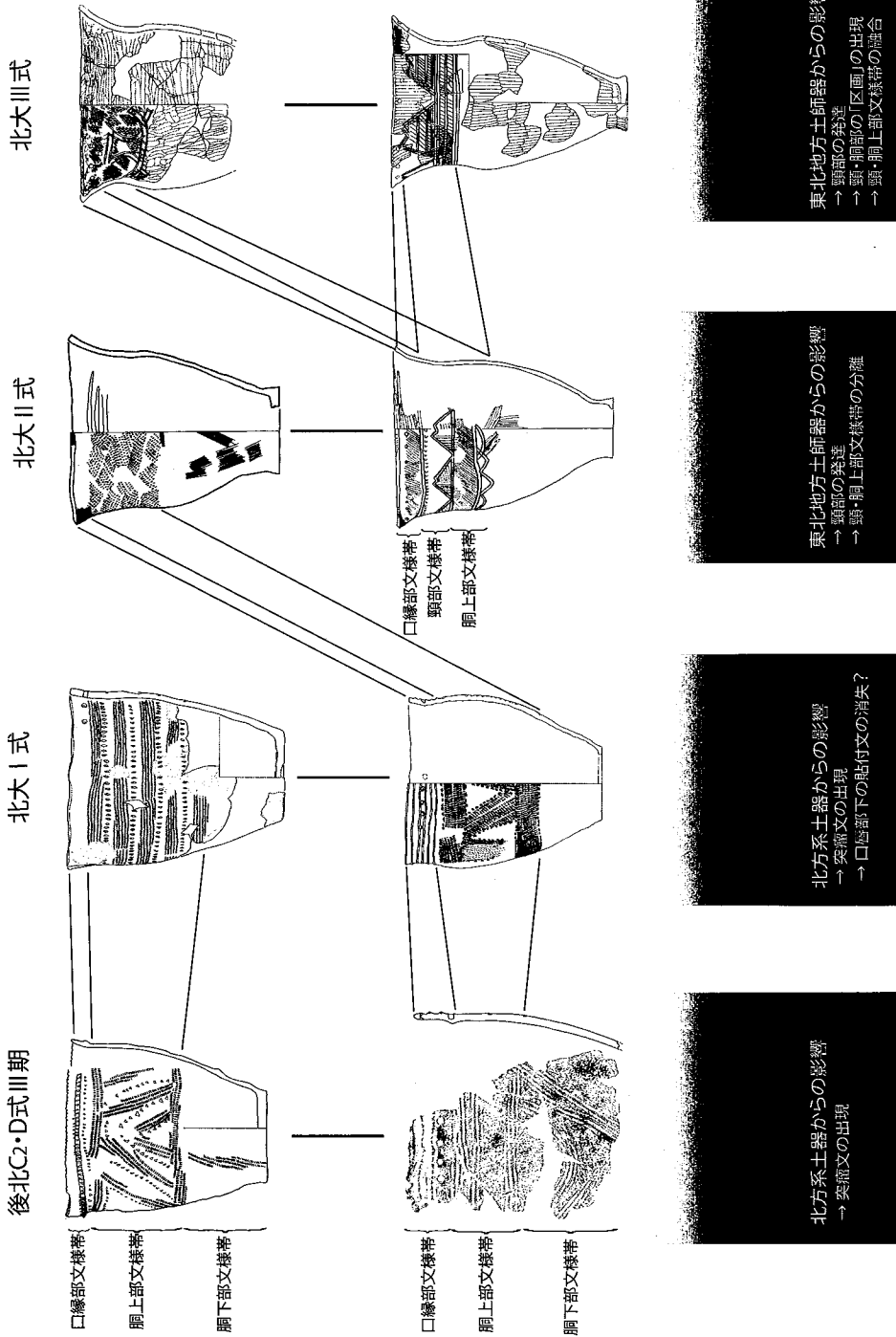


図 21 北大式の変遷におけるタテ・ヨコの系統

縮尺不同

この文様帯配置に変化が生じるのは、北大Ⅱ式からである。これ以降、頸部はほぼ例外なく作出されるようになり、この部位に口縁部あるいは胴上部文様帯が拡大するもの（図上）だけでなく、あらたに文様帯が形成される例が増える（図下）。つまり北大Ⅱ式になると、後北 C2・D 式・北大Ⅰ式に連なる文様帯配置（図上）と、口縁部・頸部・胴上部 3 帯からなるあらたな文様帯配置（図下）とが併存することになるのである。

北大Ⅲ式になると、文様帯配置が単純化し、口縁部・頸部 2 帯の配置が基本となる。それは、この時期の器形に頸部の作出が定着したと無関係ではないのだろう（鈴木 2003）。胴上部文様帯は消失するものだけではなく、頸部に転移することで、頸部文様帯と融合するとみるほうが正確なものもある（図下）。後北 C2・D 式以来の胴上部文様帯にみられたジグザグの文様意匠は、このような形で受け継がれ、北大Ⅲ式の頸部文様帯に連なると考えることができるだろう（菊池 1972；田才 1983）。

以上、後北 C2・D 式から北大Ⅲ式までの文様帯配置の様相をみた。それはめまぐるしく変化するときもあるが、必ず前の時期の文様帯配置を基礎としてあらたな文様帯配置を形成し、それが後の文様帯配置の基礎になる、という連続性をみてとることができる。そして、一連の文様帯配置のあり方を規制しているのは、どうやら器形の変化のようである。先学によって注目されてきたように、後北 C2・D 式から北大式を経て擦文土器にいたる器形の変化には、土師器の影響が関与したとみてよいだろう。ということは、北大式の文様帯配置とその変化は、土師器の影響によって規制されていたという想定を導き出すことができるだろう。

4. 文様の変異

北大式の個々の文様は、器形の変化に規制された文様帯に、施文部をさらに規制される形で多様に選択され割りつけられたと考えられる。なかには、多段化した微隆起線文など、出現がやや突発的なものも多い（たとえば図 7 の 2 個体の違いを参照）。一方、後北 C2・D 式は、採用される文様に大きな違いがみられない。この文様の共通性は、北方系土器の影響によって突瘤文が出現しても維持されており（図 6・8）、その背後に土器製作者を取り巻く規範の強さを感じさせるものである。後北 C2・D 式と、北大式の各細別型式との年代幅の違いを考慮に入れる必要はあるが、北大Ⅰ式の文様に突発的な出現をみせるものが多いのは、こうした規範の強さが緩んだ結果だと解釈したい。¹⁶⁾ その背後には、集団の頻繁な移動や分散、隣接集団同士の関係が頻繁に変わるなどによる、土器製作情報の錯綜といった事象が想定される。文様にかぎらず、同じ時期の土器に頸部やハケメ調整痕があつたりなかったり多様な様相がみられるのは、こうした事象の反映であろう。採用される文様の変異は、北大Ⅰ式がもっとも大きく、Ⅱ式、Ⅲ式と次第に小さくなっていくようである。¹⁷⁾

5. 北大式の系統の変遷

ここまで、いくつかの要素に焦点をあて、隣接諸型式の影響によって、後北 C2・D 式の系統を

くむ要素がどのように組みかわっていったのかをみてきた。以上の諸点に言及できなかった点を加え、北大式の系統的変遷をまとめてみたい。

後北 C2・D 式は、その末期になって、北方系土器からの影響により突瘤文が忽然と出現する。しかし、後北 C2・D 式の伝統であった口唇部下の貼付文の配置に変化が加わることはなく、貼付文を避けるような位置に突瘤文がつけられる（鈴木 2003）。

北大 I 式期になると、北方系土器の影響の増大からか、あたかも突瘤文の施文部位を設けるためであるかのように、口唇部下の貼付文が消失してしまう。ただ、突瘤文以外に微隆起線文などが密につけられる例もあることから、口唇部下の貼付文の消失の原因をすべて北方系土器の影響にもとめるわけにもいかない。胴下部文様帯の消失には東北地方の土師器からの影響の可能性も考えられることから、その原因にはいくつかの系統の存在を想定しておいたほうがよいであろう。いずれにせよ、前時期とくらべて情報が錯綜しだし、土器がもっとも多様な特徴を示すようになるのがこの時期である。

北大 II 式期になると、東北地方の住社式からの影響が強まり、特に頸部や底部など、器形に大きな変容をもたらす。このことが、北大 I 式の胴上部に幅広く設けられていた文様帯の分離をもたらし、頸部文様帯と胴部文様帯にわかれるような、あらたな文様帯配置をもつものが増える。住社式に出現する頸・胴部の「区画」は、北大 II 式には入っていない。突瘤文は、あるものとなないものが併存していることから、北方系土器の系統が北大 I 式に定着したわけではないことを物語る。

北大 III 式期になると、東北地方の栗囲式からの影響が強まり、器形が「胴径 \geq 口径」となるような土器は皆無になり、頸部も例外なく作出されるようになる。また、栗囲式に定着した頸・胴部の「区画」が受容されるものが多くなる。この「区画」は、文字通り文様帯の区画の役目として意識されていたようであり、胴部にあった文様帯は「区画」より上にせりあがり、頸部文様帯との融合をはたすものもある。北大 III 式の器形、頸・胴部の「区画」、頸部文様帯、文様帯内のジグザグの文様意匠などは、後続する擦文土器へと継承されていくとみられる。突瘤文は、やはりあるものとなないものがあり、北大式に完全に定着することはついになかったようである。ただ、この時期の北方系土器は、編年的に刻文系のオホーツク土器に相当すると考えられるが、そこではすでに突瘤文がプライマリーな文様要素ではなくなっている。したがって、北大 III 式の突瘤文は、II 式期に一部で受け入れられたものが「北大式内での伝統として」受け継がれたものである可能性が高く、系統の解釈には注意が必要である。

東北地方の栗囲式から受け入れられた要素は、北大 III 式に定着したのち擦文土器に連なるものが多く、この時期の南からの影響の強さをうかがわせている。当該期の研究において、擦文文化が本州系文化の影響のもとに形成されたということは、もはや疑いないことと思われるが、北大式期における土器型式間交渉の時間的推移の様相は、こうした考えにもよく整合している。土器型式の様相をみるかぎりでは、北大 III 式期の集団同士の交流が、擦文土器（擦文文化）の形成に大きく関与したとみて間違いなさそうである。

以上のように、大局的にみると、後北 C2・D 式Ⅲ期・北大Ⅰ式期に、まず北方系土器との関係が強まり、北大Ⅱ式期以降に東北地方の土師器との関係が強まる、という型式間交渉の構図を導くことができる。ただし、交渉対象の変化は、はっきりと時間的な線引きができるわけではない。厳密には、南北双方との交渉は各時期に存在し、その度合いの強弱が時間的に推移するといったほうが妥当であろう。型式間交渉の問題へのさらなるアプローチには、隣接諸型式の分析を経たうえでの比較検討が必要であり、今後の課題としたい。

先行研究との対比

表 10 は、本稿で提示した編年をこれまで提示された編年に対比させたものである。

ところで、現在もっとも詳細な分析のもとに提示された北大式の時期区分は、鈴木信（2003）のものであろう。氏の研究も、筆者同様、近年増加した資料を破綻した旧編年に対しどのように位置づけなおすか、ということに端を発しているが、同じ属性分析を用いるものの、着眼点や時期区分の方法が異なる。なかでも、北大式から型式概念を棄却した点が筆者との最大の違いであり、「円形・刺突文土器群」という上位概念をあらたに設けることで、旧編年の破綻をカバーしている。氏の目的自体は時間軸の設定にあったのであるから、筆者との方法論上の違いを問題とすることにあまり意味はないであろう。はじめにも述べたように、研究目的に応じたいろいろな土器研究法はあってもよいと筆者は考えている。しかしながら、氏の方法では明らかにできない一種の限界も存在するし、分析結果にも少なからぬ問題点がある。ここではそうした点を指摘し、筆者のとり分析手法によって、氏とはどのように違う議論が展開可能になるか、詳しく述べてみたい。

氏と筆者とで特に異なるのは、時期の区分数である。氏の時期区分は、「属性の類似が見られた場合は時間的同一と考え」、「その類似を最小の時間単位とし」、「共伴例を定点にして属性の類似の消長によって時間単元の集合（大単位）を設定する」という方法によっており（鈴木ほか 2007：314）、とりわけ器面調整の違いが「最小の時間単位」を区分する根拠にされることが多いようである（鈴木 2003）。しかし、すでに幾度も指摘したように、器面調整の違いは時期差と地域差を見分けるのが大変困難である。さらに北大式においては、それ以外の個別の属性も漸移的な変化を示すので、単一属性の違いによって分類した土器群は、設定しうる 2 つの時間軸をまたがる危険性がきわめて高い。結局のところ、土器同士の同時性を認定する根拠は「属性の類似」にしか求められなくなってしまう、氏のいう「最小の時間単位」なるまともは、層位学的根拠に乏しいというのが実状ではないだろうか。¹⁸⁾ こうした問題を抱えたままだと、土器の時期比定の精度は極端に落ちることになるし、何より研究者間で認識を共有できないという点において、北大式の編年研究が長年抱えてきた問題をクリアできていないということになる。そもそも、「属性の類似」が認められるにせよ、分類した土器群をそのまま時間軸とし得るかどうかは、一つ一つが層位事例や出土状況から検証されなければ、本来判断することはできないであろう。どのような分析法を採るのであれ、

北大式土器の型式編年

本稿の編年	斉藤 (1967)	西蓮寺 (1981)	田才 (1983)	塚本 (2007)
後北 C2・D 式Ⅲ期		後北 D 式	モヨログループ	
北大Ⅰ式	北大Ⅰ	後北 D 式・①	モヨログループ・北大 A 式	A～C 期
北大Ⅱ式	北大Ⅱ・Ⅲ	②・③・④	北大 B 式・C 式	D・E 期
北大Ⅲ式			天内山グループ	F～H 期

※ 先行研究は、北大式を扱ったもののうち、各論文中で土器と編年の対応が示されているものにかざっている

本稿の編年	鈴木 (2003)
後北 C2・D 式Ⅲ期	後北 C2・D 式 d～f 段階
北大Ⅰ式	後北 C2・D 式 f 段階 / 円形・刺突文土器群Ⅰ～Ⅴ
北大Ⅱ式	円形・刺突文土器群Ⅳ～Ⅷ
北大Ⅲ式	円形・刺突文土器群Ⅱ～ⅩⅡ

表 10 上 : 北大式編年対比表、下 : 鈴木信の編年との対比

土器を分類した数だけ時間軸が乱立する事態を避けるために必要なのが、こうした検証作業のはずである。本稿で設定した以上の時期数を保証するだけの事例は、現状では見当たらないと筆者は考えている。¹⁹⁾

それでは、筆者の検討によって、どのような問題に踏み込むことが可能になったと言えるだろうか。本稿の成果の一つは、個体別の変異がきわめて大きい北大式の個別属性を整然とした時間軸上に並ばせることで、その消長や変化の速度といった「性質」の評価が可能になったことにある（表 7）。筆者の土器分析は、時間軸を設定したのちに個別属性を評価するという手順を踏んでいる。したがって、設定した時間軸の妥当性は出土状況から検証可能であるから、個別属性の「性質」に対する評価も検証可能になる。この点は、諸属性の「性質」をアプリアリに定義する氏の土器研究との大きな違いでもある。

もう一つの成果は、北大式の個別属性の変化を、伝統（タテ）と影響（ヨコ）の相互作用から捉える視点を提示できたことである。一口に属性といってもその性格は多様であり、本稿でも注意してきたように、必ずしもその地域にあったものがそのまま変化したものだけで構成されるわけではない。別の地域で盛行したものが突然入ってくる場合もあるし、以前入ってきたものがその地で変化し根づいたものもあろう。本稿に絡め一例を挙げてみよう。北大式はⅡ式で「口径>胴径」となる器形となり、この傾向はⅢ式で一層顕著になるようである。この一連の器形の変化には、土師器の器形の影響が何らかの形で関与したとみてよいだろう。ただし、「土師器の器形の影響がⅡ式の時期に入ってそのままⅢ式に伝統として連なる」のか、「土師器の器形の影響がⅡ式の時期にもⅢ式の時期にも入っており、両時期で影響の度合いが違う」のか、Ⅱ式からⅢ式にかけての器形の変化には、このようにいくつかの仮説を想定しておかなければならないのである。そして、それを時間的・空間的に一つ一つ検証していくためには、通時性・共時性がしっかり保証された編年が前提としてなくてはならない。土器個体同士の共時性特定の精度に問題を残す編年だと、各属性がもともとどこに由来し、どのような変化を遂げるかを詳細に検証できなくなってしまうのであ

る。その点、筆者は土器の型式的特徴の通時・共時双方のまとまりに注意を払いながら時期区分をおこなったので、設定した編年は比較的整然としている。そのため、先の型式変遷の項でみたように、土器をきちんとした時間軸上に並ばせ、伝統（タテ）と影響（ヨコ）の関係の変化という視点から、北大式の変遷を構造的に捉えることが可能となり（図 21）、その型式的変遷のより細かな実態を明らかにし得たわけである。²⁰⁾

おわりに

資料数が増加した今日においては、北大式土器を大別的視点から区分するのではなく、個体別の型式学的分析にもとづく編年の確立が必要であることを説き、現状の資料から検討しなおした。その結果、内容をあらためれば、3つの細別型式からなる従来どおりの時期区分は依然有効であることが明らかになった。その一方で、型式的変遷の実態や特質について、あらたな知見を提示することもできた。零細な資料、必ずしも多いとは言えない出土事例をもとにおこなった分析ではあるが、型式的変遷の実態は捉えられていると考えるし、何より資料の実態に即させることに最大限の注意を払ったつもりである。

本稿で提示した3時期区分は、細かな時期区分案が提示されている近年の動向からすれば、一見後退した結論のように映るかもしれない。しかしながら筆者は、細かな区分が必ずしも編年としての精度の高さを示すとは考えていない。先に問題にしたように、各時期の時間軸としての独立性が現状の資料から追認されない編年は、研究の基礎として有意義だとは思えないからである。もちろん、細別を否定するのではない。今後、資料や良好な層位的出土例の増加によってさらなる細別が可能となることは当然予想されるし、土器の細かな変遷過程をたどるうえで本稿の3時期区分では目が粗くなるようであれば、細別を推し進めていくべきであろう。本稿の分析結果は、こうした将来的な変更の可能性も覚悟のうえで提示したものである。ただ、どんなに変更の可能性があろうとも、現在の資料の実態に即した分析を何よりも重視しなければならないし、それが基礎たる土器研究のあるべき姿だと考える。

本稿は、北大式の型式的枠組みや変遷の実態といった基礎的な事項の検討に終始したため、東北地方の土師器との関係を詳細に捉えるにはいたらなかった。北大式の変遷と東北地方の土師器の影響とは表裏の関係にあると考えられるので、本稿で示した北大式の実態は、全体の一部にすぎないことを認めなくてはならない。しかし、基礎的な検討なくして次のステップに踏み込むことはできない。特に、北大Ⅲ式と擦文土器との型式的境界や、東北地方の「古代北海道系」と称される土器（高橋 1982；光井 1987, 1990）との関連といった問題については、まず北大式の編年を整理したうえで論じる必要があった。紙数の都合上、こうした問題の検討はなし得なかったので、別稿にゆずることにしたい。

本稿を草するにあたり、熊木俊朗、大貫静夫、平川善祥、右代啓視、笹田朋孝、根岸洋、大坂拓の諸先生・諸氏からは、貴重な御教示を賜った。深く感謝申し上げる次第である。

また、資料閲覧に際しては、下記の諸氏・諸機関より多大なるご助力を仰いだ。末筆ながら、記してお礼申し上げたい。

いしかり砂丘の風資料館（石橋孝夫）、北見市教育委員会（武田修・山田哲）、札幌市埋蔵文化財センター（秋山洋司・出穂雅美）、千歳市埋蔵文化財センター（高橋理・田村俊之）、北海道開拓記念館（右代啓視・鈴木琢也）、北海道埋蔵文化財センター（藤井浩）

〈註〉

- 1) たとえば、大沼忠春（1980）は、松下のいう二類を含めた、従来北大式の末と考えられていた土器群には坏が伴うことから、これを続縄文土器の範疇から除外する考えを提示している。同様の考えは、横山英介（1990）によっても述べられている。
- 2) 斉藤傑（1983）は、「北大式土器は、本州から入ってきた土師器の影響によって変っていくという認識では共通している。しかし、擦文土器の成立過程についての考え方に微妙な違いが出てくる。すなわち、北大式土器を間におき、続縄文土器と擦文土器、それに土師器も加わるなかで、これらの土器の関係をどのように考えるかの違いなのであり、「その違いは、擦文土器の成立に対して、そのどこかに力点をおくかといった微妙な差」（125-126）であるという、当時の議論に対する的確な指摘をしている。
- 3) こうした理解の背後には、土器型式学に対する曲解があり、大井晴男（2004a・b）のそれが代表的なものであろう。氏の考えに対しては、小杉康（2004）が的確な批判をおこなっており、筆者もそれに同意するものである。
- 4) 当該期の研究において、このような方法で土器群を認識したものに、横山英介（1982）による「北海道型土師器」という考え方がある。
- 5) 北大式の3分類を最初に明確に示したのは斉藤傑（1967）である。氏は、文中でも図中でも「式」という文字を用いていないことから、その分類自体は型式分類ではなかったものと思われる。しかし、現在もっとも一般的に用いられている北大式の3型式区分は、斉藤の分類内容そのものである。斉藤の研究以後、氏の分類に対する体系的な検討がなされていないことからみて、氏の分類内容をそのまま型式概念に置き換えたものが、現在の3型式区分だといってよい。この学史的経緯については不明瞭な部分もあり詳述は避けるが、こうした現状の先行研究に対する内省的検討の欠如自体は問題にされるべきであろう。以下の文中では、旧来の3型式区分を述べるときは鍵括弧で括り、本稿の分析で検討すべき対象として扱うことにする。
- 6) 新潟県巻町南赤坂遺跡（巻町教育委員会 2002）では、帯縄文とハケメ調整痕とを併せもつ、後北C2・D式と土師器が折衷したような土器が出土している。また、宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡や秋田県天間林村（現七戸町）森ヶ沢遺跡（阿倍編 2008a・b）から出土した古手の北大式には、ハケメ調整痕がある。このようなハケメ調整痕の出現頻度の地域的な傾斜は、北海道出土土器のそれが、東北地方からの影響によってもたらされたものであることを強く物語っている。裏を返せば、ハケメ調整痕が東北地方から入ってくる可能性はどの時期にも存在したわけであり、その有無が時期区分の根拠としてさほど有力ではないことを示していよう。なお、鈴谷式や十和田式といったより北方系の突瘤文をもつ土器の存在を考慮すると、突瘤文の有無も時期差の指標とはならない可能性が高い。これについては後節で触れる。
- 7) 東北地方の続縄文土器を検討した小林克（1993a・b）や石井淳（1994）は、後北C2・D式や北大式の無文化に土師器からの影響を想定している。また小林は、佐藤や西蓮寺同様に、北大式の変遷に複数の

型式系統の関与を考えている。

- 8) 型式学の立場からすれば、坏や須恵器は明らかに異系統の土器群であるため、北大式の範疇には含めないのが妥当であろう。また、無文の長胴甕も、後北 C2・D 式の系統をくむとは考えにくい、東北地方の土師器に対する型式的枠組みが不明瞭な現状では、判断の難しい土器群だといえる。このため、本稿の分析の対象からはひとまず除外しておくことにする。浅鉢は、後北 C2・D 式の系統をくむ可能性が高いが、資料数や時間的な変化を反映する属性が特に乏しい器種であるため、本稿では扱わないことにした。
- 9) この点からも、道央部の後北 C2・D 式終末期には、突瘤文があるものとないものが併存しているとする鈴木信（2003）の考えには賛同しておきたい。
- 10) 宮城県築館町（現栗原市）伊治城跡（築館町教育委員会 1992）SD260・261 溝の覆土からは、口唇部下に 2 条の貼付文と突瘤文とを併せもつ後北 C2・D 式Ⅲ期の土器と、「北大Ⅰ式」が出土している。木村高（1994）は、これを「共伴」とみなし、「北大Ⅰ式」が「後北 C2・D 式末に併行している可能性」を指摘した。しかし、掘削時の掘り上げ土の流れ込みが予想される溝跡から出土した資料をただちに「共伴」とみなすには無理があろう。ほかの遺跡での出土状況を総合的に判断するかぎり、この遺構における両型式は混在とみなすのが、現状では妥当であろう。
- 11) これまで、縄文原体は、古手の帯縄文にみられる RL が古く、後出する普通縄文にみられる LR が新しいと考えられており（斉藤 1967 他）、筆者もこの点について異論はない。とはいえ、帯縄文には LR のものもいくつかみられるので、はっきり時間的に区別できるわけではないようである。このため、縄文原体の違いは重視しないことにした。
- 12) 表 2 にトーンで示した以外の組み合わせは、決して軽視することができない多さである。このため、本来ならば、一型式内の「段階差」とする時期区分のほうが、より適切であるかもしれない。ただ、これは今後の資料の増加を待たねば判断することができない問題でもある。ここでは、出土状況からみた差異を重視し、従来どおりの細別型式による時期区分を採用している。
- 13) ただし、この「縄文があり胴部文様帯をもたない」という特徴は、先に検討した北大Ⅱ式とⅢ式との中間の様相を備えているといえる。こうした特徴をもつ土器が一時期のまとまりを示す可能性もないわけではなく、その場合、北大Ⅱ式かⅢ式のどちらかを将来的に細分し得る。資料の制約から、現状では判断を保留しておく。
- 14) 東北地方における後北 C2・D 式から北大式期の遺跡発掘調査や研究の進展については、阿部義平（2008：12-37）が詳しくまとめているので、そちらを参照願いたい。
- 15) 住社式期に属する秋田県横手市田久保下遺跡（秋田県埋蔵文化財センター 1992）SK308 から出土した無文の甕形土器は、北大式の新しい時期（報告書では「北大Ⅲ式」と記載）に比定されているが、こうした器形は北海道では北大Ⅱ式からみられるので、この例のみをもってして、住社式を北大式のもっとも新しい時期に併行させることはできないであろう。
- 16) ただし、先にみた頸・胴部以下の無文化や、文様モチーフを櫛引文で置き換える手法の存在など、多様化の兆しは後北 C2・D 式末期に一部で確認できる。厳密には、この傾向が一段と顕著になるのが北大Ⅰ式期だといえる。
- 17) 実は筆者は、こうした土器を取り巻く事象の変化が、当該期社会の一端を浮き彫りにする鍵になると踏んでいる。論旨からはずれるので、詳細は別の機会に論じたい。
- 18) 氏は、文様と器面調整とでは、「土器製作者同士での情報の伝わり具合」に違いがあり、器面調整は文様に比べ伝達されにくいとみなしている。このようなことから、器面調整の違いが時期区分の根拠として有意義だとするような反論も可能かもしれない。しかし、編年研究において、諸属性の性質をアブリアリに定義することには少なからぬ問題があると筆者は考えている（柳田他 2007）。
- 19) 塚本浩司（2007）は、土器の差異や坏の共伴をそのまま時間軸に還元し、北大式を計 7 期に区分する編年案を提示したが、氏が扱った各遺跡には諸時期の資料が混在しているものもあり、賛同することはで

きない。

- 20) 例に出した器形の変遷については、本稿の分析でも明らかにし得たわけではない。こうした個別要素の変遷の詳細な説明は、本稿で提示したような基礎となる編年を土台にしておこなうべき今後の検討課題である。

〈引用・参考文献〉

〈論文関連〉

- 阿部義平 1999『蝦夷と倭人』青木書店
- 阿部義平・須藤 隆・富岡直人・奈良佳子・高橋 哲 2003「岩出山町木戸脇裏遺跡における北海道系土墳墓と出土遺物の研究」『宮城考古学』5:1-77
- 天野哲也編 2004『シンポジウム 蝦夷からアイヌへ』北海道大学総合博物館
- 石井 淳 1994「東北地方北部における続縄文土器の編年の考察」『筑波大学先史学・考古学研究』5:33-55
- 石附喜三男 1968「擦文式土器の初現的形態に関する研究」『札幌大学紀要教養学部論集』1:1-45
- 石附喜三男 1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』12:29-35
- 石附喜三男 1984「擦文土器の編年の研究」『北海道の研究 第2巻 考古篇2』清文堂出版株式会社, 127-158
- 伊藤博幸 1989「陸奥国の黒色土師器：岩手・宮城地域」『東国土器研究』2:1-15
- 上野秀一 1974「土器群について」『N126 遺跡』札幌市教育委員会, 91-103
- 氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14:1-14
- 宇部則保 2007「古代東北北部社会の地域間交流」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館, 106-138
- 大井晴男 2004a『アイヌ前史の研究』吉川弘文館
- 大井晴男 2004b『「北大式土器」の型式論的处理に関する問題：土器群の実態をどう捉えるべきか、その方法論的検討』『シンポジウム 蝦夷からアイヌへ』北海道大学総合博物館, 1-4
- 大沼忠春 1980「続縄文文化」『北海道考古学講座』みやま書房, 127-150
- 大沼忠春 1982「道央地方の土器」『縄文文化の研究 第6巻 続縄文・南島文化』雄山閣, 75-93
- 菊池徹夫 1972「擦文土器基本形態の形成」『北海道考古学』8:63-72
- 木村 高 1994「東北地方：後北 C2・D 式土器、北大 I 式土器の周辺」『北海道考古学』30:101-109
- 熊木俊朗 2001「後北 C2・D 式土器の展開と地域差：トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位 (2)」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科, 176-217
- 河野広道 1933「北海道式薄手縄紋土器群」『北海道原始文化集英』犀川会, 16-21
- 河野広道 1955「第一編 先史時代史」『斜里町史』斜里町役場, 1-75
- 河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』23:1-8, 35-42
- 小杉 康 2004『「北大式土器」の型式論的处理に関する問題：土器群の実態をどう捉えるべきか、その方法論的検討 土器型式編年と集団同定論』『シンポジウム 蝦夷からアイヌへ』北海道大学総合博物館, 5-9
- 後藤寿一・曾根原武保 1934「胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌』24(2):79-102
- 小林 克 1993a「東北北部の続縄文期の土器」『二十一世紀への考古学：櫻井清彦先生古稀記念論文集』雄山閣出版株式会社, 246-258
- 小林 克 1993b「江別 C2 式土器の本州分布をめぐって：『東北続縄文式』の視点から」『先史考古学研究』4:153-182
- 斉藤 傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』19(5):77-84
- 斉藤 傑 1983「擦文土器の成立をめぐる問題」『北海道考古学』19:125-130
- 西蓮寺健 1981「いわゆる『北大式』省察野帳：北海道千歳市ウサクマイ遺跡群が提起する問題」『古代』69・70:83-118

- 榊田朋広・熊木俊朗・福田正宏 2007「旭川市博物館所蔵サハリン州スタロドフスコエ遺跡出土土器について」『極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 13-38
- 桜井清彦 1958「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址：東北地方における集落址の研究』東京大学出版会, 141-156
- 笹田朋孝・豊原熙司 2007「北海道東部・釧路町床丹（トコタン）出土の遺物」『北方探究』8:31-65
- 佐藤信行 1967「宮城県岩出山町木戸脇裏遺跡：所謂北大式の南漸資料」『考古学雑誌』53(4):53-60
- 佐藤信行 1975「本州に於ける北大式遺跡の分布とその意義」『北海道考古学』11:67-78
- 佐藤信行 1983「宮城県内の北海道系遺物」『北奥古代文化』14:1-13
- 佐藤信行 1984「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究 第1巻 考古学篇』清文堂出版株式会社, 425-478
- 鈴木 信 2003「道央部における続縄文土器の編年」『ユカンボシ C15 遺跡 (6)』北海道埋蔵文化財センター, 410-452
- 鈴木 信・豊田宏良・仙庭伸久 2007「北海道南部～中央部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部, 304-339
- 田才雅彦 1983「北大式土器」『北奥古代文化』14:20-29
- 高橋信雄 1982「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器との対比」『北奥古代文化』13:15-30
- 谷岡康孝・下斗米哲明 1977「浦河町上野深遺跡発掘調査概報」『北海道考古学』13:45-57
- 塚本浩司 2007「石狩低地帯における擦文文化の成立過程について」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館:167-189
- 名取武光 1939「北海道の土器」『人類学先史学講座』10:1-42
- 名取武光・峰山 巖 1962「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17:107-146
- 野村 崇・大島秀俊 1992「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器 (1)」『北海道開拓記念館調査報告』31:49-65
- 比田井克仁 2002『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣
- 松下 亘 1963「いわゆる北大式についての一考察：続縄文文化の終末と擦文文化の初源との問題」『北海道地方史研究』46:6-12
- 松下 亘 1965「北海道の土器に見られる突瘤文について」『物質文化』5:14-28
- 松田宏介 2007「北辺における古墳時代土師器系譜の資料：日本列島北部における古墳時代併行期の理解に向けて」『宮城考古学』9:57-72
- 光井文行 1987「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』7:71-88
- 光井文行 1990「岩手県にみられる古代の北海道系土器について：頸部に段をもつ甕形土器を中心に」『（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』10:1-10
- 森田知忠 1967「北海道の続縄文文化」『古代文化』19(2):39-49
- 八木光則 2007「渡嶋蝦夷と亀蝦夷」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館, 139-166
- 横山英介 1982「擦文時代の開始にからむ諸問題」『考古学研究』28(4):26-34
- 横山英介 1984「北海道におけるロクロ使用以前の土師器：擦文時代前期の設定」『考古学雑誌』70(1):52-75
- 横山英介 1990『擦文文化』ニュー・サイエンス社

〈報告書関連〉

- 青森県埋蔵文化財調査センター 1999『隠川 (11) 遺跡 I 隠川 (12) 遺跡 II』青森県教育委員会
- 阿寒町教育委員会 1963『阿寒町の文化財 先史文化篇第1輯』
- 秋田県埋蔵文化財センター 1988『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I -寒川 I 遺跡・寒川 II 遺跡-』秋田県埋蔵文化財振興会

北大式土器の型式編年

- 秋田県埋蔵文化財センター 1992『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書—富ヶ沢 A・B・C 窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢 1 号～4 号塚—（第 2 分冊）』秋田県教育委員会
- 阿部義平編 2008a「[特定研究] 北部日本における文化交流—統縄文期寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告<上>」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 143 集
- 阿部義平編 2008b「[特定研究] 北部日本における文化交流—統縄文期寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告<下>」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 144 集
- 石狩町教育委員会 1975『Wakkaoi』
- 石狩町教育委員会 1976『ワッカオイⅡ—ワッカオイ地点 D 発掘調査報告書—』
- 石狩町教育委員会 1977『WakkaoiⅢ』
- 岩手県文化振興事業団 2002『中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書』
- ウサクマイ遺跡研究会 1975『烏柵舞』雄山閣出版
- 浦河町教育委員会 1969『浦河町の遺跡』
- 浦幌町教育委員会 1975『十勝太若月—第三次発掘調査—』
- 恵庭市教育委員会 1966『恵庭遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1981『柏木 B 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1987『カリンバ 2 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1988『中島松 6・7 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1989a『カリンバ 2 遺跡 第 I 地点における調査』
- 恵庭市教育委員会 1989b『中島松 5 遺跡 A 地点』
- 恵庭市教育委員会 1991『南島松 1 遺跡・南島松 4 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1992a『中島松 1 遺跡・南島松 4 遺跡・南島松 3 遺跡・南島松 2 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1992b『ユカンボシ E3 遺跡 A 地点 ユカンボシ E8 遺跡 B 地点』
- 恵庭市教育委員会 1993『ユカンボシ E9 遺跡 ユカンボシ E3 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1994『ユカンボシ E5 遺跡低地面における調査』
- 恵庭市教育委員会 1995『ユカンボシ E7 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1996『ユカンボシ E9 遺跡 B 地区』
- 恵庭市教育委員会 1997『ユカンボシ E10 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 2004a『恵庭公園遺跡』
- 恵庭市教育委員会 2004b『柏木川 7 遺跡』
- 恵庭市教育委員会 2004c『カリンバ 3 遺跡 (3)』
- 恵庭市教育委員会 2004d『茂漁 7 遺跡・茂漁 8 遺跡』
- 江別市教育委員会 1982『萩ヶ岡遺跡』
- 江別市教育委員会 1988『高砂遺跡 (4)』
- 江別市教育委員会 1989a『大麻 3 遺跡 (3)』
- 江別市教育委員会 1989b『高砂遺跡 (5)』
- 江別市教育委員会 1989c『元江別 10 遺跡』
- 江別市教育委員会 1991『高砂遺跡 (8)』
- 江別市教育委員会 1993『高砂遺跡 (11)』
- 江別市教育委員会 1994a『高砂遺跡 (12)』
- 江別市教育委員会 1994b『町村農場 1 遺跡 (3)』
- 江別市教育委員会 2004『江別市内遺跡分布調査 (1)』
- 江別市教育委員会 2007『高砂遺跡 (18) 江別市内遺跡分布調査 (4)』
- 小樽市教育委員会 1985『忍路 11 遺跡』
- 小樽市教育委員会 1989『蘭島遺跡』

- 小樽市教育委員会 1991『蘭島遺跡 C 地点 餅屋沢 2 遺跡 (概報)』
- 小樽市教育委員会 1992a『蘭島遺跡 D 地点』
- 小樽市教育委員会 1992b『チブタシナイ遺跡』
- 小樽市教育委員会 1996『蘭島餅屋沢 2 遺跡』
- 小樽市教育委員会 1998『文庫歌遺跡Ⅲ』
- 小樽市教育委員会 1999『塩谷 6 遺跡Ⅳ』
- 小樽市教育委員会 2003『船浜遺跡Ⅲ』
- 小樽市博物館 1963『発足岩陰遺跡』
- 小樽市博物館 1970『茶津 4 号洞窟遺跡 発足岩陰遺跡』
- 音別町教育委員会 1984『ノトロ岬』
- 北見市教育委員会 2007『常呂川河口遺跡 (7)』
- 札幌市教育委員会 1974『N162 遺跡』
- 札幌市教育委員会 1976『S153 遺跡』
- 札幌市教育委員会 1984『T464 遺跡・T465 遺跡・T466 遺跡・T468 遺跡』
- 札幌市教育委員会 1990『K135 遺跡 4 丁目地点 (1988 年度調査)』
- 札幌市教育委員会 1992『N426 遺跡』
- 札幌市教育委員会 1995『K113 遺跡 北 34 条地点』
- 札幌市教育委員会 1996『N175 遺跡』
- 札幌市教育委員会 1999『K499・K500・K501・K502・K503 遺跡 (第 4 分冊) [K 503 遺跡]』
- 札幌市教育委員会 2003『C424 遺跡・C507 遺跡』
- 札幌市教育委員会 2005a『M459 遺跡』
- 札幌市教育委員会 2005b『K135 遺跡 第 4 次調査』
- 白老町教育委員会 1980『アヨロ』
- 寿都町教育委員会 1963『寿都遺跡』
- 仙台市教育委員会 2004『鴻ノ巣遺跡 第 7 次発掘調査報告書』
- 滝沢村教育委員会 1987『高柳遺跡』
- 伊達市教育委員会 1984『伊達市南有珠 7 遺跡発掘調査報告』
- 千歳市教育委員会 1974『ウサクマイ遺跡－B 地点発掘報告書－』
- 千歳市教育委員会 1977『ウサクマイ遺跡－N 地点発掘報告書－』
- 千歳市教育委員会 1978『苗別川流域における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1979a『ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1979b『続千歳遺跡』
- 千歳市教育委員会 1986『梅川 3 遺跡における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1990『イヨマイ 6 遺跡における考古学的調査 (2)』
- 千歳市教育委員会 1991『祝梅川山田遺跡における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1994『丸山遺跡における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1995『ウサクマイ N・蘭越 7 遺跡における考古学的調査』
- 築館町教育委員会 1992『伊治城跡』
- 弟子屈町教育委員会 1971『弟子屈町下鑑別遺跡発掘報告』
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設 2001『トコロチャン跡遺跡』
- 常呂町教育委員会 1996『常呂川河口遺跡 (1)』
- 常呂町教育委員会 2000『常呂川河口遺跡 (2)』
- 常呂町教育委員会 2002『常呂川河口遺跡 (3)』
- 常呂町教育委員会 2004『常呂川河口遺跡 (4)』

北大式土器の型式編年

- 常呂町教育委員会 2005『常呂川河口遺跡 (5)』
- 常呂町教育委員会 2006『常呂川河口遺跡 (6)』
- 苫小牧市教育委員会 1984『タブコブ』
- 苫小牧市教育委員会 1987『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』
- 苫小牧市教育委員会 1990『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』
- 苫小牧市教育委員会 1991『静川 9 遺跡』
- 苫小牧市教育委員会 1995『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』
- 苫小牧市教育委員会 1996『美沢 10 遺跡』
- 苫小牧市教育委員会 2002a『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅶ』
- 苫小牧市教育委員会 2002b『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』
- 苫小牧市教育委員会 2002c『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅹ』
- 泊村教育委員会 1996『堀株神社遺跡発掘調査報告書』
- 泊村教育委員会 2004『堀株 1 遺跡』
- 仁木町教育委員会 1999『モンガク B 遺跡Ⅱ』
- 西目町教育委員会 1987『宮崎遺跡発掘調査報告書』
- 八戸遺跡調査会 2001『田向冷水遺跡発掘調査報告書』
- 八戸市教育委員会 2004『八戸市内遺跡発掘調査報告書 18 市子林遺跡第 6 次 C・第 7 次』
- 八戸市教育委員会 2006『田向冷水遺跡Ⅱ』
- 平取町教育委員会 1996『カンカン 2 遺跡』
- 平取町教育委員会 1998『ヌタブ遺跡・川向 1 遺跡』
- 平取町教育委員会 2000『亜別遺跡』
- 北海道大学埋蔵文化財調査室 1983『北大構内の遺跡 [2]』北海道大学
- 北海道大学埋蔵文化財調査室 1987『北大構内の遺跡 [5]』北海道大学
- 北海道埋蔵文化財センター 1982a『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1982b『吉井の沢の遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1983『美沢川流域の遺跡群Ⅵ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1986『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1988『新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 第 2 分冊 美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1990『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1991a『牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1991b『フゴッペ貝塚』
- 北海道埋蔵文化財センター 1992『美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1993a『美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1993b『ユカンボシ E5 遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1994『美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ』
- 北海道埋蔵文化財センター 1996a『キウス 7 遺跡 (3)』
- 北海道埋蔵文化財センター 1996b『ユカンボシ C9 遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 1997『キウス 7 遺跡 (4)』
- 北海道埋蔵文化財センター 1998a『キウス 5 遺跡 (5) A-2 地区』
- 北海道埋蔵文化財センター 1998b『キウス 5 遺跡 (6) B 地区・C 地区』
- 北海道埋蔵文化財センター 1998c『ユカンボシ C15 遺跡 (1)』
- 北海道埋蔵文化財センター 1999『ユカンボシ E7 遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 2001『ウサクマイ N 遺跡』

- 北海道埋蔵文化財センター 2002『奥尻町青苗砂丘遺跡』
北海道埋蔵文化財センター 2003a『西島松 5 遺跡』
北海道埋蔵文化財センター 2003b『西島松 9 遺跡』
北海道埋蔵文化財センター 2005『柏木川 4 遺跡・柏木川 13 遺跡 (2)』
北海道埋蔵文化財センター 2006『西島松 5 遺跡 (4)』
巻町教育委員会 2002『南赤坂遺跡―縄文時代前・中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査―』
峰山 巖・金子浩昌・松下 亘・竹田輝雄 1971『天内山―続縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡―』北海道出版企画センター
室蘭市教育委員会 1962『室蘭遺跡』
盛岡市教育委員会 1997『永福寺山遺跡』
門別町教育委員会 1979『日高門別の先史遺跡』
余市町教育委員会 1999『入舟遺跡における考古学的調査』
余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査Ⅱ』
余市町教育委員会 2001『大川遺跡における考古学的調査Ⅳ』
余市町教育委員会 2004『大川遺跡 (2003 年度)』

〈図の出典〉

- 図 1・9・12・16・21：筆者作成。
図 2：齊藤 (1967) 第 1 図・第 1 表をもとに作成。
図 3-1・2：北海道埋蔵文化財センター (1993b) 図 V -2-71 をもとに作成。同図 3-3・4：北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 53・54 をもとに作成。
図 4-1：苫小牧市教育委員会 (1995) 第 4-17 図 -43・第 4-18 図 -58 をもとに作成。同図 2：北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 56 をもとに作成。
図 5：田才 (1983) 第 1 図をもとに作成。
図 6：札幌市教育委員会 (1976) 第 157 図をもとに作成。
図 7：北海道埋蔵文化財センター (1998c) 図 V -25 をもとに作成。
図 8：熊木 (2001) Fig.86 をもとに作成。
図 10：石狩市教育委員会 (1977) Fig.5・15・39・41 をもとに作成。
図 11-1：恵庭市教育委員会 (1981) Fig.425 をもとに作成。同図 2～6：北海道埋蔵文化財センター (1982b) 図 7-54・59・95・96 をもとに作成。
図 13：石狩市教育委員会 (1975) 第 26・27 図をもとに作成。
図 14-1・2：小樽市教育委員会 (1992a) Fig.11・21 をもとに作成。同図 3：北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 46 をもとに作成。同図 4～9：北海道埋蔵文化財センター (2003a) 図 IV -28・31・37・42・85・213 をもとに作成。
図 15-1～3・9：北海道埋蔵文化財センター編 (1982b) 図 7-32・54・59・70 をもとに作成。同図 4：余市町教育委員会 (2000) 35 図をもとに作成。同図 5：石狩市教育委員会 (1975) 第 28 図をもとに作成。同図 6：千歳市教育委員会 (1977) 第 14 図をもとに作成。同図 7・8：恵庭市教育委員会 (1987) Fig.46・61 をもとに作成。同図 10・15・16：北海道埋蔵文化財センター (2003a) 図 IV -93・99・112 をもとに作成。同図 11～14：北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 47・51・57 をもとに作成。
図 17-1・2：江別市教育委員会 (1982) 図 150 をもとに作成。同図 3～5：北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 48 をもとに作成。
図 18-1・6・18：北海道埋蔵文化財センター (1998c) 図 V -25・26 をもとに作成。同図 2・8：恵庭市教育委員会 (1981) Fig.281・425 をもとに作成。同図 3：小樽市教育委員会 (1996) Fig.83 をもとに作成。同図 4・5：野村他 (1992) 第 9 図 39・49 をもとに作成。同図 7・12・14～17：北海道埋蔵文化財センター

- 編 (1982b) 図 7-32・54・59・67・95・96 をもとに作成。同図 9～11: 北海道大学埋蔵文化財調査室 (1987) 第 32 図をもとに作成。同図 13: 北海道埋蔵文化財センター (1996b) 図Ⅲ-13 をもとに作成。
- 図 19-1～7: 石狩市教育委員会 (1975) 第 26・27・28 図をもとに作成。同図 8・12: 北海道埋蔵文化財センター (1993b) 図 V-2-71 をもとに作成。同図 9: 小樽市教育委員会 (1989) Fig.9 をもとに作成。同図 10: 江別市教育委員会 (1988) 図 17 をもとに作成。同図 11: 江別市教育委員会 (1991) 図 15 をもとに作成。同図 13: 苫小牧市教育委員会 (1984) Fig.67 をもとに作成。同図 14: 苫小牧市教育委員会 (2002b) 第 4-82 図をもとに作成。同図 15: 札幌市教育委員会 (1995) 第 10 図をもとに作成。同図 16: 千歳市教育委員会 (1979a) Fig.63 をもとに作成。同図 17: 余市町教育委員会 (2000) 35 図をもとに作成。
- 図 20-1・16: 北海道埋蔵文化財センター (2003a) 図Ⅳ-149・213 をもとに作成。同図 2・3・14・15・17: 北海道埋蔵文化財センター (1999) 図 46・47・53・54 をもとに作成。同図 4: 北海道埋蔵文化財センター (2003b) 図 20 をもとに作成。同図 5・6: 恵庭市教育委員会 (1988) 図 24 をもとに作成。同図 7・8: 北海道埋蔵文化財センター (1990) 図Ⅶ-9 をもとに作成。同図 9: 小樽市教育委員会 (1992a) Fig.21 をもとに作成。同図 10: 恵庭市教育委員会 (1993) 図 65 をもとに作成。同図 11: 恵庭市教育委員会 (2004a) 図 52 をもとに作成。同図 12: 小樽市教育委員会 (1989) Fig.69 をもとに作成。同図 13: 千歳市教育委員会 (1977) 第 14 図をもとに作成。

Typological chronology of Hokudai-type Pottery
: First basic examination for studying about stage of change
from Epi-Jomon to Satsumon culture

SAKAKIDA Tomohiro

Hokudai-type Pottery belongs to transition from Epi-Jomon to Satsumon culture. Although many chronological studies of this one have been presented until today, most of them disagree about method of studying about pottery, classification of potteries and division of time scale. At present studying about Hokudai-type Pottery is very confused.

This paper analyzes Hokudai-type Pottery by typological method as fine as possible. Resultly I have been able to reconstruct 3 times chronology of one of previous studies and clarify how Hokudai-type Pottery changed. It becomed clear that Hokudai-type Pottery changed complicatedly by influence from northern Hokkaido area and Touhoku area in each phase.

This is my first basic examination for studying about stage of change from Epi-Jomon to Satsumon culture.